



喫茶

店

文

芸

7・8

月

合併号

喫茶店文芸 2022年7・8月合併号——目次

太田

短編集

1

天野満

ナタリー・ダイアリー vol.1

7

kenken

宿無し

11

福原大輝

才能の華を咲かせるために

17

福原大輝

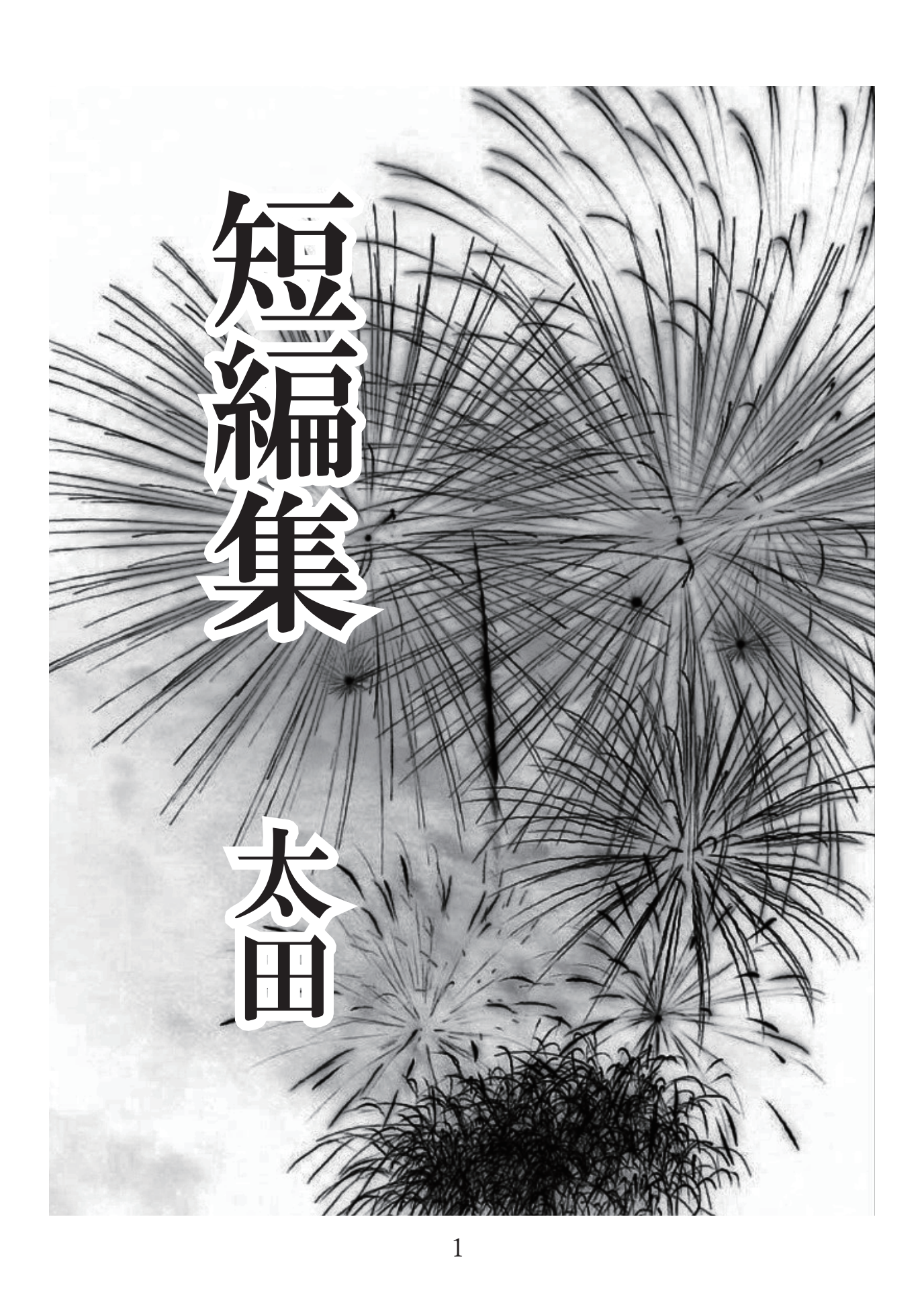
家族の大切な熟女

23

氷川省吾

屍病

27



短編集

太田

母

窓の外は雪混じりの雨足だった。少し遠くに聞こえる車の往来はまだ幼かった頃の我が家の前の道を彷彿とさせた。

そこには大きな木が何本も生え、大きな窓のむこうにカーテンとなつて存在していた。それはもうない。

津波で塩害の犠牲となつた木々の多くは朽ち、業者によつて根本から切る羽目となつた。

切つた先に未来はない。再利用されない存在は僕らの知らないところで燃やされるだけだ。

病院の匂いがする。看護師の声にもそれが混ざっているようで、冷たい雰囲気を感じさせる。

私は椅子を窓側に寄せ外を眺めている。広がる田んぼの先に小さな町が見え、ガソリンスタンドと家電量販店の看板が目立っていた。遠くに焦点を合わせようと何度も工業港の煙突から出る煙を見ようとする。でもまた窓に映る自分の顔が浮かんでくる。

時刻は20時を回ろうとしていた。眠る母に向き直り、明日またくる旨を心の中で伝える。

私は昨日、ここへ来たのだろうか。

私は明日、ここへ来るのだろうか。

八輪

女性の幸せとは何なのだろう。母はどんな花が好きなんだろう、どんな色が好きなんだろう。聞いてみたこともない私自身はじゃあ、何者なのだろう。父はどうだろう。妹たちは。

「このままでよろしいでしょうか」少女が言う。

「はい」答えた私自身が、何がだ、と眉間に皺を寄せる。

少女はこちらの表情に気がついていない。

思い出した。私はコンビニで買える宝くじのチケットを受け取っていて、それについて彼女は質問していたのだ。慌てた私は「ああ、」と言う。

「はい」と怪訝そうに返事をする彼女を一瞥して、私は何も答えずにそそくさと店を後にする。

彼女の「はい」の言い方はまるで私の眉間の皺に気がついていたらようであつた。そうに違いなかった。

彼女は同僚だ。夜勤の仕事を終えた私は朝の6時にシフトインした彼女と交代になる。挨拶しかない仲だし、気にはしていなかったが、私の存在を疎ましく感じているようだった。そういえば声をかけても返事をしないことがあったような気がする。

また明日だ、と顔を叩くイメージを頭に描きながら家路につこうと駅へ向かった。

駅に行くには歩道橋を越えて国道の反対側へ行く必要がある。わたしには習慣があつて、必ず歩道橋の真ん中に来たら空の観察をする。

今日は月が出ていた。青い空に遠く佇む上弦の月は、ススキを

飾れと、この先近い団子の季節を匂わせる。三日月は星々にどけどけといって、陣地取りに成功していた。

歩道橋を降りると小学校の前へ出る。ここは東北の田舎。子供の数が減るこの町の空気感はいまだ登校してこない子供たちの数少ない声をさらに彷彿とさせる。

午前6時5分を少し回るくらいだろうか。車の台数が増える。

夜20…35分。軽自動車を止め、地元のファミレスの扉を押す。同時に店内の音が少し聞こえてくる。中扉を押す。今度ははつきりとフジファブリックの「若者のすべて」が聞こえてきて少し気分が乗る。この店のセンスを僕は少し気に入っていた。

フロアを見渡し、2人を見つめる。俊樹が手を上げていた。私は2人掛けの席のエリアをすり抜けながら窓際のボックス席へ向かった。テーブルの左手前にドリンクバーのコップがある。薫はトイレに立っているようだったが、すぐに戻ってきて「よ」と挨拶してくれたので私も「うい」と返す。

「近況報告は」俊樹が発破をかけた。

「何が」省吾はいつものオレンジジュースをストローで飲みながら、やめて周りを一通り見てから前に向き直った。

「わかるよ、仕事だろ。大丈夫。すぐ見つけるって」薫がファミレスの長椅子の背もたれに両腕を大きく広げながら左肩で汗を拭くような仕草をする。これはこいつの癖だ。

「お前、省吾の親父さんがせっかく当てがってくれた席蹴つってよくそやさんな態度できんな」と俊樹がいう。

「まあまあ」と省吾がいう。

薫は何も言わずに天井の照明を眺めていた。

4人目の僕は4人掛けのテーブルの薫の左隣でケータイのメールの履歴を適当にスクロールしていた。登録しているサイトからのメールで埋め尽くされたボックス内を順に拒否にしたりしなかったりしてゆく。

「第一、薫が心配でみんなこうして集まってんのに、その態度は何だよ。まるで俺たちが説教でもしにきたみてーじゃねーか。甘えてんじゃねーぞ」と俊樹が言う。

すると踏ん返り返っていた薫が無精髭の塊のような顎髭を撫で始める。

こうなると話が変わってくる。このリーダーは誰なのだろうか。私は以前から気にはしていたのだが、最近実はわかってきたことがあった。薫が髭を撫ではじめたり、おどけた表情を突然やめたときなんかはみんな黙りこくってしまう。そう言う空気が流れるのだ。薫は場の空気を搔っ攫うのがうまい。それは言葉ではなく、威圧でもない。もしかすると肩幅の広さかもしれないし、目の下のクマがつよいからかも知れなかったが、答えはわからない。

省吾と私は顔を一瞬見合せて、薫が次に何を言うのかを待った。

「子供ができた」

「は、」沈黙が長く感じたあとの私の口から出た音をきっかけに3人は顔を見合せて口をあんぐりさせるばかりであった。

台風の日

とある夏、台風で電車が止まった。私は夜勤明けに自宅まで歩く羽目になった。

大きく曲がりうなだれる枝と葉は、首の皮一枚で何度も右往左往している。落ちて行った葉はどこへ行ったのだろう。私はその木のことを何も知らないの、ただその横を通り過ぎる。

ここは一応国道らしいところではあるが、透明な雨合羽を羽織る私の横を、何度も何度も車が通り過ぎていく。

単子葉類か双子葉類の孫たちの上を何ともなしに歩き過ぎる。

目線と思考のギャップによって今の私の表情はさぞかし滑稽でおぞましい怒りに似た表情になっているのだろう。

私の顔の態度は、通りすぎる車の反射で、何となく想像がつく。不遇を嘆き、目の下にできた隈はやっぱり世界の鏡であった。

歩けど歩けど田圃道。カエルの合唱は夜の営み。空の乱舞は午後の気まぐれ。だけれど今日はそうじゃない。さつきから後ろに迫る黒い雲は予定を大幅に超えて風を吹かせていた。

伸びしろを考えればこんなものでは済まない。私は急ぎ足で小高い山を歩道に沿って降りてゆく。遠くに見える何度目かの上り坂は、垂直の壁みたいに車を上昇させてゆく。白、青、黒、黒、白、わからない、黒。

このあたりの人間は黒い車が好きらしい。そのあと三台黒い軽自動車が続いていった。

車の通りが少なくなった。通勤ラッシュは去り、ついにひとり

の遭難者となった私はケータイをポケットから出そうと合羽の内側に手を入れた。

カラカラと手に伝わる感覚がある。取り出してみると、バイトの同僚の女性にお土産でもらったチョコレート菓子が出てきた。

夏だ。ポケットで温まったそれは袋の隅々まで行き渡りドロドロになってた。ビスケット生地部分はかろうじて手に伝わってくる。これをもう一度ポケットに戻す勇気がなかったの、ブカブカのポロシャツのポケットに、こんどは入れ直した。

ナタリー・ダイアリー Vol.1
天野満

ナタリー爆川（満24歳）

○改名

さらば、天野満よ。今までありがとう。

唐突ではあるが、ペンネームを変更することにした。

バンドを始めた際に、ステージネームを使ったりする人がいるが、私も例にもれない。

私は本名をもじり、24と名乗っていたが、せっかく七年間の時を経てバンドが再結成、もはや新人なのであるうえ、ステージでは極めて中性的な格好をしているのだから、ステージネームも変更したら良いのではないか、と思ったのである。

で、私は「ナタリー爆川24歳」を名乗ることにした。

読みは「ナタリーハゼカワニヒャクヨンジュウヨンサイ」である。

一見してからに、けっしたいなこの名前にも、ちゃんとした由来がある。私はネーミングに一家言ある人間だ。しらんけど。

まずはナタリーの部分だ。

もともと、私は「ヒッキー・セラヴィー」という名前を名乗ろうと考えていた。

ヒッキーと言うのは私の考えた架空のロックスターの名前で、セラヴィーと言うのはフランス語で「これが人生」という意味の言葉で、私の好きなバンドの曲名にもなっていた。で、その二つを足して名前っぽくしたのだ。

この名前を親友に話した際に面白いことが起こった。彼が別の友人に私を紹介した際に、記憶違いをして、ナタリーと紹介して

しまったのである。

ナタリー、という名前に、なんだかポップな感情を覚えたために「ナタリー」を採用するに至った、というのが由来である。

続いて、「爆川」の部分についてだ。

爆、というのは私の大学時代のあだ名に由来する。

大学時代、私のあだ名は「ボム兵」であった。加入していたサークルの先輩が、新入生になんとなくの印象であだ名をつけるという遊びをしていた。他の同級生たちは「おめめ」「馬鈴薯」などの名前を授かり、私は「ボム兵」の名を授かった。

ボム兵。そう、かの有名なテレビゲーム「スーパーマリオ」に登場する爆弾にゼンマイと足のついたファンシーなキャラクターである。なぜ、私がボム兵なのか。理由はわからずじまいである。

不思議なことに、他の同級生たちのあだ名は広まることがなかったのだが、私の「ボム兵」だけは三日もしないうちに大学中の知り合い中に広まっており、今もなお、私は「ボム兵」と呼ばれている。そして、その名を気にいつている。だから「爆」の文字を取り入れた、というわけだ。

ちなみに「川」は私の好きな漫画「ドロヘドロ」に出てくる、会川というキャラクターからとった。食い意地の張った乱暴者だが、友達思いの良いキャラクターで、私のお気に入りだ。

「24歳」というのは何だ、というところにも理由がある。

ナンバーガール、という日本の偉大なロックバンドがいる。そのバンドのベーシスト、中尾憲太郎氏が「中尾憲太郎〇〇歳」と名乗っているのを、僭越ながら拝借させていただいた。中尾氏は実年齢を表記していらいっしやるのだが、私の場合はそこに「24」

の数字を入れさせてもらった。

ずいぶん長くなってしまったけれど、天野満改め「ナタリー爆川 24歳」をよろしく願います。過去と現在と未来、私の好きなものに溢れた名前で非常に気に入っているけれど、画数は縁起が悪くないだろうか、なんて気になったりして。でも、了です。ああ、了なんです。

「待つて待つて待つて待つて待つて。俺の名前の要素がないじゃん。そうか、君はそういう奴だったんだな」

天野満がエミールじみたことを言つて、包丁を片手に病んだ顔つきでこちらを見つめている。俺はまだ死にたくない。

「満年齢にするわ」

俺はペンネームを「ナタリー爆川（満24歳）」に改めた。満が包丁を投げ捨てて私に抱きついてきた。刃物を投げるな、と彼に説教するのは怖いのであとにする。

OLIVE

二〇二二年七月二十三日は忘れたい日になった。

私の所属しているバンド「world ethic」の復活ライブの日だったのである。そして、私が七年ぶりにライブハウスのステージに上がった日である。

七年前、バンドが解散した頃は「二度とバンドはやるまい」と思っていた。バンドを辞めたあと、新しい人間に生まれ変わろうとして、住む場所を変え、職業を変え、ひたすらにバンドをやることから距離を置き続けた。

でも、人間とはどこでどうなるかわからん、前言を撤回しまくっ

て、もう一度ステージに上ることを決めた。バンドをやりたくて今度は住む場所を変え、職業を変えた。全くもって人生というやつは奇妙なものだ。

機材の準備を終えたら、楽屋で待機。その間に衣装を整える。見た目に無頓着な俺が唯一見た目を気にする瞬間かも知れない。ステージドリנקのペットボトルのラベルを剥がすのは七年前と変わらないライブ前のお約束。

出番が近づくにつれ、期待と不安、今までのことやこれからのこと、恐怖と熱狂、さまざまな思いが頭を駆け巡った。身体が冷えて震える。この緊張がステージに上がる理由なんだと思う。

出囃子が鳴つて、いよいよ出番が来た。

ステージのそでで、メンバー同士、えいえいおー、なんつって勝ち鬨をあげてステージに上がる。この瞬間が好きだ。

暗い客席には人、人、人、人の海。見知った顔と知らない顔。好奇心に溢れた目、目。

「度肝抜いてやる」

勝負嫌いの俺が、唯一愛する勝負の瞬間、その始まり。

ステージの上に立ってデカイ音を鳴らせば、宙に浮いているような気分になる。ドクターマーチンの底はたしかにフロアを踏み締めているのに、夢の中を歩いているような感覚だった。

研ぎ澄まされる感覚と鈍麻する感覚、矛盾した感覚を同時に、強烈に味わう。整っているけど散らかっているし、散らかっているけど整っている。LIVEとは良く言ったものだ。俺は今、猛烈に生きている。

最後の曲が終わったあと、快樂と疲労でその場でぶっ倒れそう

になった。おかげでステージにドリンクを忘れた。あと、ピックホルダーも。

久しぶりによく眠れそうだな。楽屋で抜け殻みたいになりながら俺はそう思った。

あのステージの上で、俺はたしかにライブのことだけを考えていた。他のことを全て忘れて、没入する。そんな純粋な時間を七年間、心のどこかで欲しがっていたのだ。へ年間求めていたものは最初の場所にあった。

なんたる皮肉、なんたる感動。この耳鳴りが生きてる実感、魂の証、ひたすら歩んできた道。

これからまた歩んで行く道。

(了)



宿無し

kenken

第一章 土色の明日

1

承応二年（西暦一六五三年）の話である。

二十二歳になる味噌職人の彦八は、走っていた。通り過ぎる風が、目に染みる。目に涙が浮かぶ。

心ノ臓が早鐘を打った。森林に囲まれた、一人が歩けるだけの細い道を、躍りになって走った。味噌蔵へ急いだ。

露を帯びた土が草鞋に絡む。落葉を踏む。先ほどまで爽やかだった草木の匂いが、今は疎ましいものを感じた。

泣きそうだった。焦っていた。必死に足を動かした。喉が渴いた。

「はーはー、ぜーぜー」止まって休憩したい。水を飲みたい。

だが、父の一八の怒りまくる姿が脳裏に浮かんだ。怖い、怒られる。彦八は歯を食い縛り、さらに足を速めた。

道に沿って、円錐形の樹形をした杉の木が並んでいる。細長く直立し、枝葉が丸みを帯びた綿のように付いていた。杉の木の樹皮は人肌のような赤みを滲ませ、彫りの深い姿をしていた。

彦八は、杉の木の横を抜けると、視界が開け、森林を抜けたと思った。眼下に田圃が広がる。田圃を抜ければ、町に出る。

もう父にばれているかもしれない。鼓動が異常に速くなる。心ノ臓を加虐する。足が地面を蹴るたびに、後悔と自責の念が頭を擡げた。

なぜ、横になろうと思った。なぜ、寝てしまった。過去の自分がいたら、咎めたいと思う。

彦八は額から汗を滴らせていた。首や背中にも熱を感じる。息

が荒い。休みたい、だが、急がねばならない。

前方に、黄金色の稲穂が実る田圃が迫る。頭を垂れ、一年の労苦が結実し、後は収穫を待つ。土から剥き出しになった石を避けて走る。下り坂の道が彦八の足を速めた。

突然、身体が宙に浮かんだ。地面に落ちている石に蹴躓いた。胸から地面に倒れた。胸と頬に痛みが走る。

起き上がると、着物に泥がついていた。体のあちこちに痛みを感じた。草鞋が脱げていた。

頬に触ると、血と泥がついていた。目から涙が溢れた。急がなきゃ。着物についた泥を払い、草鞋を履くと、また駆け出した。田圃の畦道を走った。

畦道には、柳蓼が生えていた。円柱形の茎をしていて、葉が尖っている。彦八は柳蓼を踏んで、先を急いだ。

ほんの休憩のつもりだった。一八から頼まれた、味噌の天地返しの中で、味噌蔵を抜け出し、二町ほど離れた野原で横になった。野原には池があり、彦八の好きな目高が泳いでいる。鉄律が黄緑色の花をつけていた。そこは、彦八のお気に入り場所だ。町人はほとんど通らず、一人になれた。そこにいれば嫌な思いを忘れられた。

目が覚めた時には、夕方になっていた。赤く染まった陽が西に傾いていた。慌てて起きると、駆け出した。

2

畦道を走り、一町ほどすると、平坂街道の先つちよに出た。急に人の気配が多くなった。

彦八の勤める味噌屋は、街道沿いに建っている。昔からある豆味噌を作り、町人には味噌を、旅人には味噌おにぎりを振る舞い、そこそこ繁盛していた。

駆けていると、何人かの町人が振り返った。彦八は気にしている暇など一切ない。さらに駆け出した。

前方に純助がいた。こちらに向かって歩いてきた。純助は同じ五人組の一人で、薬屋を営んでいる。身体つきは中肉中背で、木綿の着物を羽織り、医者でもないのに、総髪に髻を付けていた。

医者気分なのだろう、好い気なものだ。

薬を売り出したのは、ここ最近だが、不思議と繁盛している。町では腹痛が流行り、純助に銭を与えていた。

純助は走る彦八を、訝しげに睨み、腑に落ちない顔で尋ねた。

「どうしたんじゃ？ いったい、何を慌てとる？」

「急いでいるんじゃ、一八に叱られる」彦八は走りながら、言葉少なく答えると、純助を置いて、先を急いだ。

3

半町ほど走ると、味噌屋に着いた。

一八は、店の前にいるだろう。彦八は、一八の目に入らぬように、裏手に回った。自然と緊張した。手足が小刻みに震え、喉がごくりと音を立てる。全ての音を逃さぬよう、耳に集中する。

微かな音にも目線を送り、反応した。すーはー、自分の息の音が聞こえる。極限まで集中した心は、どんな些細な変化も見逃さない。

彦八は無事に、井戸に着いた。井戸は無人だった。彦八は蓋を

開け、釣瓶^{つるびん}をゆつくりと井戸の中へ落とす。

ぽちゃん大きな水の音がした。やつちまった。彦八は、焦った。一八に聞こえたのではないか、急いで周囲を見渡す。

一八が飛んでくる気配はなかった。ふー、よかった。肩を下ろして息を吐いた。

彦八は、できるだけ音を立てぬよう、滑車に繋がれた縄を、慎重に引っ張った。ざーざー、釣瓶から水が落ちる音がした。どきつとした。

周囲に変化はない。心ノ臓が痛い。小刻みに震えて、歯型が噛み合わない。そのままなんとか縄を引っ張った。

水を汲んだ釣瓶が滑車から上ってくる。眼前に釣瓶が上がった。急いで、鹽^{たぐい}に水を張ると、井戸に蓋をして、釣瓶を載せた。

鹽の水を、手で掬い、手や顔に付いた泥を洗い流した。頬に痛みが走った。転んだ時につけた傷口に触れた。濡れた手でそっと、傷口の泥を落とす。

なんでこんな目に遭うんじゃ。彦八は気持ち減入り、頭を落とした。また涙が溢れた。音を出さぬよう、静かに泣いた。涙で視界が歪む。目を閉じてても涙が止まらず、着物の裾で涙を拭いた。泣き終わると、鹽に残った水を手で掬い、口に含んだ。冷たい水が乾いた喉を潤す。

久方ぶりに爽快な気持ちになった。ふー、息を吐いた。さらに水を飲むと、余った鹽の水を静かに流し、片付けた。

4

彦八は足音を立てないよう、忍び足で味噌蔵に入った。

また、緊張し始めた。足が震えるのを感じた。足元が覚束ない。^{おぼつか}震える齒のかち合う音を聞きながら、注意深く周りを窺う。

陽が傾き、味噌蔵の中は薄暗く、蔵の奥は、闇に溶けていた。人の気配はなかった。ぷーんと、濃厚な味噌の匂いがした。

味噌蔵には、幅六尺ほどの味噌の入った樽が、百個ほど置いてある。一つの味噌樽に、千六百貫ほどの味噌が仕込んであり、味噌の上には重石^{おもし}として、八百貫の石が円錐状に置いてあった。樽には僅かだが、小さな割れ目があり、そこから、汁がこぼれていた。彦八は一八がいらないのを確認すると、大きく息を吐いた。ふー、ばれていないようだ、急いで天地返しをしよう。

彦八は急ぎ足で、味噌樽に階段を掛けると樽を登った。味噌を抑えるために、積み上がった石を三個ほど、胸に抱えると、足早に階段を降りる。

地面に石を置くと、また階段を登る。それを繰り返す。かなりの重労働だ。顔が火照って、暑くなる。額に薄っすらと汗が出る。背中も熱を帯びる。

本来は三人一組で行なう作業だが、今日は他の二人が休みのため、彦八一人で行なっていた。石は二百五十個ほどある。

石を積む職人になるのに、十年は掛かると言われている。

彦八は、味噌職人になって十二年ほど経つ。もう仕事は覚えた。立派な職人だ。だが、今もって味噌は苦手だ。仕事だと割り切っているが、他の職人のように味噌と向き合う仕事はできない。味噌を愛せない自分がいた。精魂を込めて作れなかった。いつもどこかで、手を抜こうとした。

自分は味噌作りは向いていないと思う。さすがに十二年もやつ

ていると、顔には出ないが、心の中では、顔を顰めてしまう。

石を十個ほど下ろした時、先ほど飲んだ水で、冷えたのか、急に腹が痛くなった。手でゆっくり腹を摩るが、痛みは止まらない。ぎゅるるる、腹から嫌な音がした。慌てて、味噌蔵から出ると、店の外に作られた厠に向かった。

厠から声が聞こえた。

「うーん、はああああ、うんうん」誰かが気張っている。

彦八は泡を食って、肛門に力を入れた。待てない。腹がさらに鳴った。ぎゅるるる、ぎゅるるる、やめてくれ、早く代わってくれ。彦八は、厠の扉を叩く。

「今、入っている。静かにせんか」太い声がした。一八の声だ。

一瞬、彦八は動きが止まった。わー、声にならない悲鳴を上げた。あやうく、身が出るところだ。腹も悲鳴を上げた。

ぎゅるるる、ぎゅるるる。助けて！ しんぼう堪らず、彦八は、さらに扉を叩く。普段なら反抗心すら湧かない一八に、初めて殺意が沸いた。殺したい、本気で思った。

「わかったから待っていなさい」一八は静かに扉を開けると、縮んだ巨体を伸ばし、颯爽と出て行った。

彦八は、獲物を見つけた鷹のように、鋭い速さで厠に入った。

できたての糞尿の臭いが、鼻を刺す。だが、気にしていられない。

慌てて、糞を取ると、糞尿を入れる穴に跨った。腹に力を入れる。下痢だ。突き上げるような痛みが走る。そのまま垂れ流した。軟便の音がした。ふーふー、息が弾む。

尻に違和感がある。まだ、出しきれていない。さらに腹に力を入れる。ぐーと、便が弾けるように、押し出され、肛門から飛

び出した。ぎーぎーと音を立て、穴に落ちた。もういいだろう、はあー、大袈裟に息を吐く。自分の便の臭いがした。臭い。

彦八は気を取り直して、紙で股を拭いた。呆けたように空を見つめた。出るものを出したからだろうか、痛みが治まった気がした。

もう、踏んだり蹴ったりだな。少しかだけ落ち着いた彦八は、絶え間なく続く不幸に自嘲気味に笑った。頬を触ると、傷口の血は固まっていた。

井戸で念入りに手を洗うと、また味噌蔵に入った。陽は沈み、辺りは暗くなっていた。

蔵の中は闇となり、積んである石も確認できない。どうしよう。まだ味噌の天地返しがない。間に合わない。彦八は焦った。顔が上気する。緊張が走る。

先ほどの一八を思い出して、恐怖した。頭の隅では、どうやって誤魔化すか、考えていた。

石が多かったから、思うように進まなかった。階段が壊れたから、終わらなかった。いや、いっそのこと、天地返しは終わった話にしたらどうだ。

そうだ、そうしよう。彦八は決めた。誰も見ていた者はいない。このまま終わった話にしよう。

夜目が冴えてきた。手探りで石を確認しながら、取り除いた石をまた、一つ一つ積み上げていった。良心は咎めたが、一八に怒られるよりはマシだと思った。石を積み終わった。腹を決めた彦八は、そ知らぬ顔で味噌蔵を後にした。



足元から風を感じた。それでも雄一は気にすることなく、目の前のプリントに集中して採点を続けた。だが、ふふんという笑い声にはさすがに声をかけた。

「才華ちゃんっ」

その声にビクッと身体を震わせるが、やがてうふふと彼女は笑った。

小学一年生の才華は床で四つん這いになってこちらを見上げる。

「ここから入らないっていつも言ってるでしょ」

雄一は足元の窓を指さした。開けられたままの窓からは春の風が入り込んでくる。

彼女は立ち上がってスカートのほこりを払う。

「だって、こっちからが近いんだもん」

たしかに教室の玄関は、建物の回り込んだところであり、この窓からが最短かもしれない。だが雄一は論すように言う。

「小さい子が真似するからやめなさい」

彼女も十分小さい子なのだが、教育的にいつもこう叱るようにしている。

えー、とわざとらしく言った彼女は地窓を閉めに戻った。それから、靴を置きに玄関へと行く。そっちのほうが手間じゃないのだろうか。

プレハブで作られたこの教室には、子供たちが来る一時間前から雄一と教室の塾長が先に入って準備をする。そのとき、教室の窓を開け換気するのだが、雄一が地窓の鍵を閉めることはない。叱ったこととは矛盾するのだが、才華の遊んでいる姿を邪魔した

くはなかった。

教室には、雄一と塾長がいて、白い長机に子供が五、六人いた。子供たちはそれぞれ自分の学力に合った教材を解いている。まだお昼過ぎだから小学生にもなっていない子ばかりだが、彼らは一人で勉強するというのを身につけている。助けを求められれば雄一は手を差し伸べるが、基本的には、子供の自立を重んじている教室である。

教室は静かな空気に包まれるかと思いきや、

「なんで、違うの」

才華は隣で飛び跳ね、駄々をこねている。

三学年先の教材に取り組んでいる彼女にとっては、確かに難問である。

「もう少し考えてきて。できるから」

だが、雄一はそっけなくそう言った。彼女は不満そうに、赤で×がつけられたプリントを振り回しながら席に戻る。だが、やがてもう一度雄一の元に現れて「わかんない」とプリントを投げつけてくるので、雄一はそれをそのまま返す。何度かプリントを投げつけ合うのを繰り返し、諦めた彼女はふてくされて席に戻る。

最初はわからなくて当然である。そのように壁にぶつかることが大事だと雄一は思っている。問題にぶつかって立ち向かうことが子供たちの成長につながる。

時間がたつと、もう少し大きな、小学校の低学年の子たちが現れ始める。才華と同じくらい歳の子ばかりで、彼女も走ってその輪の中に入る。

彼らは教材を机に出しながら、輪になってそれぞれの学校で

あったことを話し始め、教室は活気づいていく。その雰囲気壊したくなかったが、雄一は気を引き締めてそのうちの一人に声をかける。

「智弘君、席でやりなさい」

「はい」

智弘は聞き分けのいい子であり、彼に声をかけたらまわりのみんなもそれに従う。

彼らは十分に賢い。集中するとすさまじい力を発揮して、上の学年の問題も正解を導くことができる。

そして、大人の顔色を見て行動する。

日が陰ってくる頃、才華が教室に来るときは通らない、玄関の扉が開かれた。

「すみません塾に行かないといけないんです」

眼鏡の女性はいつもこうして早口でまくし立てる。彼女は才華の母親だ。

また別の日には、ピアノが、スイミングが、英会話が、……いろいろな理由がそこに入るが、口調はいつも同じだ。

あらあらと言う様子で、塾長はわざとらしく時間をかけて才華を探すふりをする。

才華は荷物をまとめ始めた。教材が終わっていないときはその残りを持たせて、塾長は才華を玄関へと導く。

「ありがとうございます」

才華は困ったような笑顔でいつもそう言う。丁寧に頭を下げるその姿は雄一の目に寂しく映った。親の前では先ほどまでの快活な様子は消え、才華はしおらしい女の子になる。母親は才華の背

を押し出すように、教室から出て行った。

この教室も学習塾のはずなのにな、雄一は子供たちに聞こえないように心の中でつぶやいた。

夕方になるとそれぞれの教材を終え、子供たちはみんな帰っていく。

子供たちが学習した後の白机は黒鉛で汚れている。その汚れを布巾で落としながら、雄一は塾長に話しかけた。

「この子たちってどれだけ勉強するんですかね」

才華や智弘だけでなく、他の子供たちも同じように学年の先々まで進んだ内容を学習している。それなのに、ほとんどの子が他の学習塾や習い事にも通っている。

「ここだけじゃなくて、他の塾も行ったり、英会話とか、たくさん習い事したり、僕が子供の時には考えられないほど忙しく過っています」

そうね、と塾長は言った。

「そんなに焦って勉強する必要のないのにね」

最近は熱心な親御さんが多いから、とその後つぶやいた。

本棚の横で寝てしまった才華を起こそうとしたら、智弘に袖を引かれた。

「起こさないであげて」

今日は、低学年の男の子たちが激しく喧嘩をしていた。物の取り合いが流行っていて、それがエスカレートした結果、一人の男の子が才華の筆箱に手を出したように見えた。カエルの口が取り出し口になっている円柱状の筆箱だった。

才華は男の子と二人で筆箱を引つ張り合い、だがやはり力では及ばず、奪われてしまい泣きべそをかいた。塾長に問い詰められると、実は才華の方からこっそり手を出したようだった。これからはお互いに勉強の邪魔しないようにと、塾長は注意した。

その後才華はいじけた様子で教室にあるパズルを始めて、そのまま眠ってしまったということなのだ。

でも、やがて彼女の母親が教室に来てしまう。教材が全く進んでいないと具合が悪いと思った。

雄一は智弘に訊く。

「なんで起こしちゃダメなの？」

智弘は幼いながら、つばを飲みこんで思考をまとめてから話す。

「学校でも似たようなことがあって疲れていると思うんだ」

「似たようなことって？」

「物の取り合い。でもそのとき才華ちゃん、我慢していたんだ」

先ほどの取り合いのときの才華は、男の子に泣かされそうになっっているのに、にやにやしていて、どこか楽しげだと雄一は思っていた。それが不思議だったのだが、智弘の話を聞いて納得がいった。

学校で騒ぎを起こしたら、家庭にまで連絡が行ってしまうということを危惧しているのだ。それで学校では我慢しているのであるが、ここでは同じ学校ではない子供の方が多い。我慢せずに発散しているのかもしれない。

雄一は才華の閉じられた顔からしずくが一つ落ちるのを見た。

そのとき、扉の音が鳴り、雄一は驚いた。見上げるとそこに才華の母がいた。

寝ている才華をにらみつけ、一気に怒声を上げる。その勢いで才華だけでなくその場の全員がそちらを向いた。

何しているの、勉強は、

しつかりやりなさいっていつも言っているのにあなたは どうして……

すさまじい剣幕で言葉が繰り出された。

怒声が収まったところに、お疲れだったみたいで、と雄一が言うと母親は彼をにらみつけて低く言った。

「すみません、失礼します」

母親はまだ靴を履ききっていない才華の腕を引つ張った。振り向く余裕を与えられなかった才華のその表情を見ることができなかった。

「才華ちゃんがいなくなった？」

雄一は慌てて、携帯を落としそうになった。教室は休みで家にいる日だった。

そうなの、と塾長は言った。

「今うちの子の塾に迎えに行っているところで……。だからごめんなさい。行ってあげてくれる？」

「わかりました」

どうやら才華は家から突然いなくなったらしく、母親が探しているようだった。心当たりはないかと、塾長に連絡があったのだ。

雄一は急いで才華の家に向かった。そのまわりには、近所の親御さんや才華の同級生など、人だかりができていた。

才華の母はそこにいる人たちに対して、塾長から聞いたことと

同じ話をした。とにかくいつの間にかいなくなっていたらしい。雄一は焦れて訊いた。

「きっかけか何かわからないですか？」

「きっかけ？」と繰り返し、母親は呆けた顔をした。

「わからないんです。普通に宿題してただけなんですが」

普通に、と雄一は脳内で繰り返した。

「今日はピアノがあるんです。それで呼びかけようとしたら……」

ピアノがあるんです、という彼女の言葉から雄一は耳をふさいだ。嫌な感情が広がっていき、それが表情に出ることに気にも留めなかった。

きつと母親には悪気がないのだろう。でもその言葉や言い方が雄一は嫌いだった。

とにかくこの辺りで探してみようと、誰かの父親らしき人が言った。

夕方過ぎ、空が暗くなっていた。搜索するその中に、智弘もいたので、雄一は訊いた。

「心当たり、ないよね」

智弘は小さくうなずいたが、その後ぼそつと言った。

「でも、きつときついんだと思う」

何がとか聞く前に雄一はその言葉の意味を理解していた。かがみこんで目線を合わせてから、智弘に訊く。

「智弘君は大丈夫？」

「才華ちゃんほどじゃないから」

小さく微笑んだ彼をいじらしく思った。

すると、突然に才華の母が話しかけてきた。

「先生、教室は今日お休みだとは思いますが、そのあたりを一応見てきてもらえますか？」

はい、と短く答えて雄一は塾長の家へ急いだ。教室の鍵は塾長が持っている。だがしかし、その途中であることに気づいて、踵を返し教室へまっすぐに向かった。

教室に着く頃には空が暗くなって、プレハブの教室は一層物々しく、向かう足が少しためらわれるほどだった。だけど雄一は一直線に教室に近づいて、玄関に回ることはなかった。

子供の背の高さくらいある窓を見つめ、そつとそれに手をかけた。音を出さないように動かすと、それは抵抗もなく開いた。雄一は細身だったので、なんとかその隙間から入り込むことができた。

暗い教室の中で目が慣れてくると、教室にあるパズルや本が散らかっていることに気が付いた。それらは次第に乱雑に入り組んでいて、その奥、玄関の前に、才華は猫のように丸まっていた。「才華ちゃん」

小声で呼びかけると、彼女は顔を上げた。その後雄一に向かって走って、抱きついた。泣いているかもしれないが、彼女は少しも声を出さなかった。ただ震えていた。暗い部屋で雄一は何も言わなかった。

なんで家を出て行ったの？ 習い事がいやだったの？

聞きたいことはいくつもあったけど雄一は黙っていた。

彼女にとってはここだけが安寧の場所だったのかもしれない。広げられたパズルと本が彼女を取り囲んで、何者かから守ってい

るようだった。

雄一は何も言えずにいたが、彼女は突然彼から離れた。

暗い中でも勝手知ったる様子で、塾長の机上のティッシュ箱を探しに行き、鼻をかんだ。

そして、帰る、と一言言った。

「お母さんに連絡していい？」と雄一が言うと、こくりとうなずいた。

教室に母親が迎えに来て、いつもの癖で才華は靴を履きながら言った。

「ありがとうございます」

彼女はいつものように、しおらしい女の子になってしまった。

また元の生活に戻るのはいやなのかもしれない。だとしたら、

雄一は彼女を引き留めたほうがよかったのだろうかと思った。

「すみませんピアノがありますので」

才華の母はまた教室の玄関に入るなりそう言った。その様子はいつもと変わらぬように見えて、少し改めたようだった。才華が幸せそうな笑顔で教室を出て行く度雄一は安心していった。

塾長に事情を話したとき、また親子で衝突することがあるでしょうね、と言っていた。

「それでも、才華ちゃんのことを大切じゃないわけじゃないはず」
確かに雄一もそうだと思った。

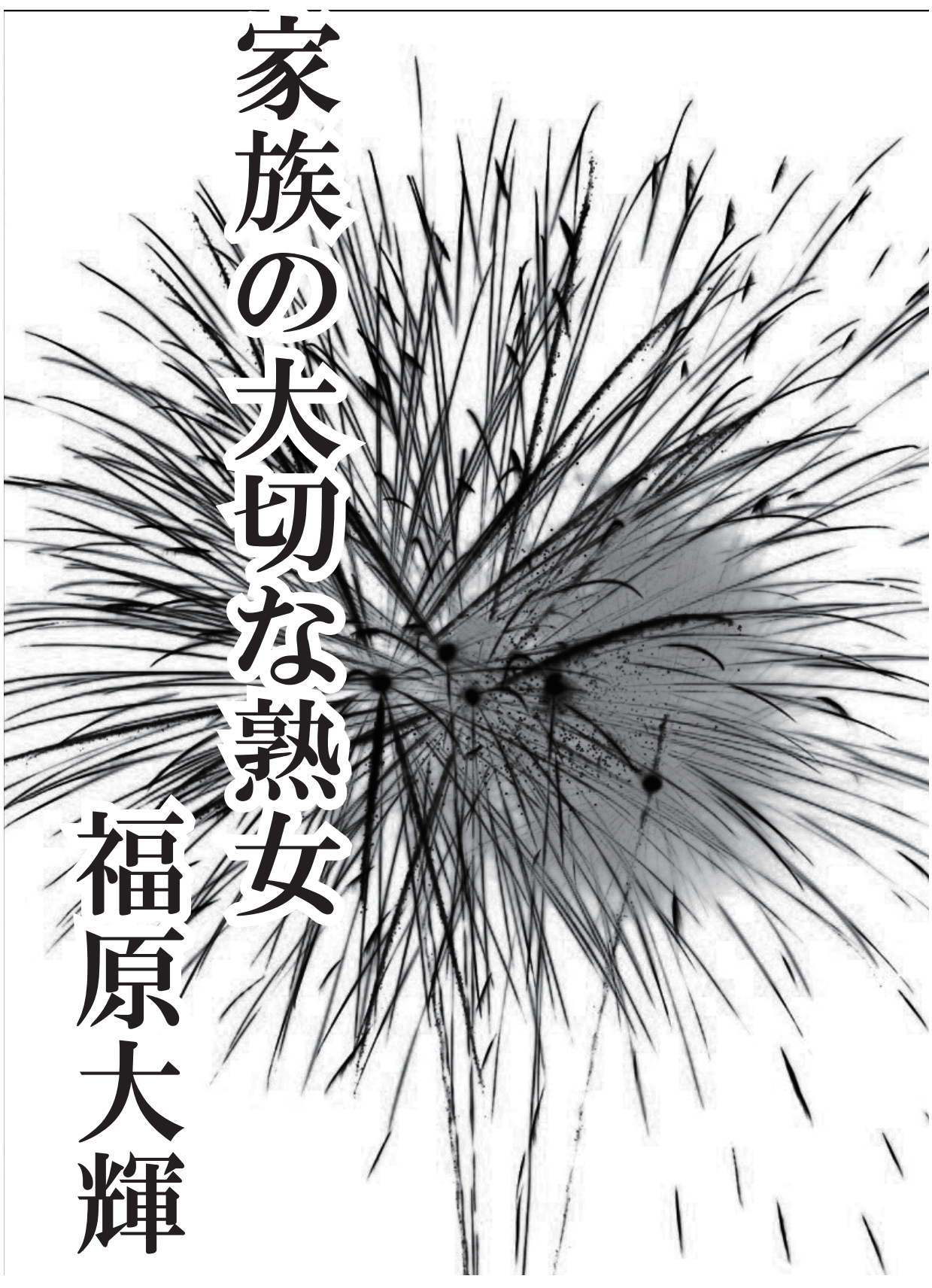
ただ大切に。

育ててほしいと思う一心で。

才能の華を咲かせたい、という気持ちが周囲の人を動かす。

子供たちは無限の可能性を持っている。その華を咲かせるために躍起になっている親や雄一たちがいて、その中で、子供たちは何を思うのだろう。そして、この日々を思い出したときどう感じるのだろう。

教材の答えを知って、大人になった彼らに訊いてみたい。
何が正解だったのって。



家族の大切な熟女

福原大輝

身体起こすのが億劫なこともあるし、ずっと寝ていたい。わたし、もうそこそこの歳なのかも。熟女ってテレビで言ってた気がする。

わたしがげだるげに身体を起こすと、ママが顔をのぞき込んできた。眉根を寄せて心配そう。

今日はわたし、散髪に行った。そのとき、美容師さんがいつもと違って、耳の下の毛を切りすぎちゃったみたい。

ママはそれを気にしているのだ。わたしが昼寝から目覚めた今でも。わたしは心配そうなママの顔をしっかりと見返した。

——この方がずっといいわよ。だから、そんな悲しい顔しないで。

毛が長いとかゆいから、と言ってわたしは首を振って見せた。

——ママ、心配しなくて大丈夫だよ。

でも、わたしの方もそんなママを心配していたから、それが表情に出てしまったのだろう。

ママはなおいつそう悲しそうな顔で、わたしの頭をなでてきた。すぐに伸びるわよ、とわたしはぼそぼそと言った。

夕方になって、玄関で物音がした。

その直後、「ただいま!!」とリビングまで声が響いてくる。

うるさい子が帰ってきた、とわたしはうんざりする。

あみちゃん、今日はなんだかうれしそう。ランドセルを放って小躍りしている。学校でいいことでもあったのかしら。

そのとき、ママがわたしを向いて言った。

「今日、お兄ちゃんが久しぶりに帰ってくるんだよ」

——あ、そうだった。忘れてた。

それでうれしそうにしているのか。大声を上げて走りまわっている。

そのままの勢いで、あみちゃんはわたしを抱き上げた。そして、腕を握ってわたしを振り回し踊り始めた。強制的に伸ばされた身体は安定を失って、わたしはすぐに車に酔ってしまったように、頭がくらくらする。わたしは耐えることに必死で、声を上げることができない。

やっとあみちゃんはわたしを離してくれた。身体が解放されてわたしは安住の地を求めてふらふらと歩き回った。クツションにたどり着き、ため息をつく。本当にあの子は面倒だったらありやしない。

お兄ちゃんが帰ってくるだけで、なんでこんなにうれしそうなのかしら。

そのとき、玄関が再び音を立てた。

「あ!」とあみちゃんは声を上げた。床を鳴らし、玄関へ走っていく。

その下をくぐって、わたしはあみちゃんを追い越した。それから、玄関で靴を脱いだお兄ちゃんに無我夢中で飛びつく。

——お兄ちゃん、お帰りなさい。お待ちしてました。

わたしは全身を投げ出す。お兄ちゃんはわたしをきちんと受け止めて、転ばないようにしてくれる。

「うれしい? ねえ」

そう言いながらお兄ちゃんはわたしを撫でまわした。

なんでこんなうれしいのかしら。

ご満悦なわたしは、嫉妬心を募らせたあみちゃんの視線に気が付かなかった。あとで仕返しをされることは、この時のわたしはわからない。

パパが帰ってきて、一家の食事が始まった。

芳醇なおいはいつものごはんからは、絶対に感じられないものだ。わたしは鼻を膨らませて、食卓に近づいた。

パパはお酒を飲んで気分が高揚していて、大声で話をしている。ママは次々と食事を出している。

わたしはパパの椅子に手を伸ばして、食べ物のおいを近くで感じようとする。パパはそれに気づいてこちらを向いた。

「ほしい？」とパパが訊いてくる。

——ほしいです。

「はいはい」

パパはわたしの口元に食べ物をさしのべる。わたしはパパの手をかまないように、それを口に入れた。非常に美味である。パパを見てわたしは感謝する。

——ありがとうございます。

わたしの感動はすさまじいものだった。しかし、美味なひと時も束の間、台所仕事を終えたママがパパをにらみつけている。

「あげたらだめっていつも言っているじゃん！」

「ごめん、欲しがってたから」

とパパは謝るけど、ママは怒ったままだ。

ママが怒るのは嫌なので、わたしはママに身を寄せて、精一杯

のごめんなさいをする。

——ごめんなさい。わたしが欲しがるから悪いんです。

——でもほしいんです。いつものでは飽きてしまうんです。わたしが必死に謝ったら、ママも笑顔になった。

——ちがう。そこじゃない。

わたしはお兄ちゃんに伝えようと、身体的位置を変えるがうまくいかない。お兄ちゃんの撫で方は要点を得ない。

——そんなんだからあなただめなのよ！
でもしばらくすると、

——そう、そこ、そう。

わたしは何も考えられないほど、気持ちよくなってきた。

——やればできるじゃない。

——あなたも……。むにやむにや……………。

「あ、寝ちゃったよ」

呼びかけに家族が集まった。

幸せそうな熟女犬の寝顔を家族が見つめていた。



屍病

氷川省吾

榊陽介は唐突に目を覚ました。視界がぼんやりして、体がひどく重い。何かの夢を見ていたような気がするが、それが分からない。

少し経つと、自分の状況を把握した。ここは職場の仮眠室。狭い部屋に簡易ベッドが2つ置かれている。自分はその1つに寝ていたのだ。

体が動くようになったと思ったら、無意識のうちにベッドから出て立ち上がっていた。何をしようと思って立ち上がったのかが分からない。ややあって、顔を洗いたいと思っていたのだと気が付いた。顔や手がひどくべとついている感じがする。

まだ目がしょぼつくが、開けっ放しになっていたドアから廊下によるめき出て洗面所を目指す。トイレは仮眠室のすぐ近くにあるのだが、廊下に出た時に右に行けばいいか、左に行けばいいかが分からなくなり、少しまごついてしまった。人を感じたセンサーが廊下の灯りを付ける。ひどくまぶしかったが、すぐに目が慣れた。無味乾燥な、窓のない白い廊下。

そこでようやく洗面所のある方を思い出し、やや頼りない足取りでそちらに向かった。これほど簡単なことが分からなくなるとは、それほど疲れているということだろうか。

実際、仮眠室に行く前までは何日も眠っていなかった。3日か4日か。よく覚えていない。そもそも、ここに来てどれぐらい経ったのだろうか。3カ月以上になるはずだが、それもよく覚えていない。職場に窓が無い——正しく言えば地下にあるので窓があっても意味が無い——上に、外出が出来ないので日時の感覚がめちやくちゃになっている。

ろくに風呂にも入っていないかったように思う。シャワーを浴びたか、どうだったか分からない。どうも体から嫌な臭いが漂っている気がして仕方がない。着たきりスズメだったせいかな、それとも寝汗やら不健康な生活で体臭がひどくなっているのか。それとも両方か。

頭の中がぐちゃぐちゃになったまま洗面所にたどり着き、ろくに手元を見ずに、蛇口のセンサーに手を差し出す。手に当たる水の冷たさをしばらく感じた後、手で受けた水に突っ込むようにして顔を洗った。だが、2回目で手元が狂って水が胸元にぶちまけてしまった。

うげ、と思って見てみると、カッターシャツがびっしょりと濡れていた。驚いたことに、白衣もちゃんと来ていた。普通は寝る前に脱ぐはずだが、着たまま寝てしまったらしい。

しわくちゃになったら面倒だったが、予想ほどひどくはなかった。それにこの職場では、重要な場所以外での服装はそれほどうるさく言われることが無い。

ようやく頭がある程度働いてきたところで、榊は顔を上げて鏡の中の顔を見た。やせ型のボサボサ髪の男。しばらくまともに日に当たっていなかったのと、不規則な生活によって肌が青白く、無精ひげも合わさっていかにも不健康に見える。今年で30になったばかりだが、15年分は老けて見えた。

この職場に来る前はここまでひどくはなかったはずだ。仕事そのものの負担より、この職場の特異な環境がストレスになっているのだろう。これまでの人生に比べると、この環境ははるかに変わっている。

榊の人生は普通だった。医大の大学院を出て、製薬・バイオ関連の企業でしばらく働いた。世間的にはエリートと言えるかもしれないが、研究者としてはことさら変わったものではなかった。それが、さる縁でこの職場にスカウトされたことで変わった。

スカウトされた時の話では、超最先端で非常に重要な研究に携わる者を探しているとのことだった。話をする場所として案内されたレストランでは給与の話も聞かされたが、目の玉が飛び出るような額だった。10年ばかり勤めるだけで、残りの人生を働かずに過ごせそうなほどだ。

だが同時に、異常に高いレベルの機密保持契約を結ぶ必要があった。万が一情報を漏らした場合、訴訟どころか刑事罰を受ける。あるいはそれ以上のペナルティが。さらに就業中は外出が制限され、外部との連絡も取れない。そして仮に重大事故があった場合には、命を失う危険もある。

もはや脅しとは思えないような内容であっても、給与の額が見せる輝きは曇らず、榊は大いに迷った。

そしてもう1つの魅力ある話を聞かされた。仮にこの仕事で重要な成果を残した場合、それはノーベル賞級の発見になる。成果は決して外部に知らされることは無いが、相応の身分が与えられる。何かがあってその成果が活用される場合、世界の救世主にもなるだろう。

誇大妄想が極まったホラ話に思えるが、スカウトをしてきた男が提示した身分証、そして“交通費”と断る場合の“口止め料”として出してきた封筒の中に詰まった札束を見れば、これがまぎ

れもない本当の話だと理解した。さらに、話し合いの場所として案内されたレストランの中の、従業員も客も全員がスカウトしてきた相手の仲間で、そのうちの何人かは上着のボタンを外している——腋の下から銃を取り出せるようにしている——ことに気づくと、もはや疑うことも出来なかった。

しばし考えた末、榊はスカウトを受けた。結婚もしておらず、親類縁者もいない。交友関係も乏しい。研究だけが今の人生の大半を占めていた。自分がいなくなっても誰も気づかないし、最新の研究に携わり、最高の給与を得ることが出来るのはこの上ない好機だった。

後で聞いたところによると、この仕事へのスカウトは榊のような人間を相手に行われているようだ。生理学、医学、生物学、防疫学などのエキスパートであり、尚且つ他者との交友関係に乏しい人間。研究職の人間で孤独な者は多そうだが、意外と適合する者は少ない。それ故に、榊をスカウトした時の様な手間と金を掛けることもできるらしい。

奇妙な転職を行ってから2か月後。身支度を終えた榊は空港からヘリコプターに乗せられ、長い時間のフライトを体験した。窓にもカーテンがかけられていたので行き先は分からなかったが、かなり長い間海上を飛んだのが分かった。

そうして辿り着いたのは、絵に描いたような無人島だった。外見は伊豆諸島の青ヶ島に似ている。島全体が火山の頂上部で、内側がカルデラになっている。外側が火口の外縁に囲まれて中が見えず、上陸が困難な地形だ。

青ヶ島は活火山で、島には少ないながらも人が住んでいるが、

ここは死火山で無人だと説明された。いるのは「職員」と「警備員」だけだ。

ヘリは無人観測所の横に作られたヘリポートに着陸した。仕事どころか人間が住む場所さえなさそうに見えたが、それは当然だった。これから榊が仕事を行うことになる「職場」は、その地下に作られて隠されていたからだ。

顔を洗って何とか脳が働くようにした榊は、先ほどよりは少しマシな足取りで洗面所を出てた。直後に自分が次に何をしようとしていたのかが分からなくなったが、すぐに自分の持ち場に帰ろうとしていたことを思い出した。仕事の続きをしなくてはいいけない。重要な局面に差し掛かっており、それで徹夜続きになっていたのだ。

何度か道を間違えそうになりながら、窓が無い廊下を歩き続ける。途中にあるドアの窓からは、部屋の中に自分と同じように白衣姿の職員がいるのが見えた。いくつか開きっぱなしになっているドアもある。基本的にドアは常に閉めておくように決められているのだが、時折こうやって忘れる奴がいる。今日はそれが多いような気がした。自分と同じように疲れている者が多いのだろうか。注意しようにも部屋の中は空だったので、代わりに閉めておいた。

途中で職員の女とすれ違った。狭い職場なので顔を知っているはずだが、名前が浮かんでこない。ひとまず挨拶をしたのに、まるでこちらがいないかのように無視してすれ違った。誰もかれもダメダメな状態だ。これではいつかやばい事故が起こりかねない。

そういえば今は何時だろうか。腕時計を見ると、針は午前4時を示していた。普通の人間の認知力が最も低くなる時間帯だ。

自分は少し寝たのでマシになったが、彼女はどうかと思つて振り返ると、すでにいなくなっていた。足が速い。それともボケた頭が幻覚を見せたのか。

仮に頭がおかしくなっていると判断されれば、すぐに警備員がやってきて拘束される。仕事で取り扱っている代物に暴露していかどうかを徹底的に検査され、大丈夫だと分かっても、危険だと判断されればクビになる。頭がイカれた人間に、危険物を取り扱わせることは絶対に出来ない。

精神面だけでなく、肉体面での異常も常にチェックされている。廊下の天井には、サーモグラフィを搭載した自動判別機能付きの監視カメラがそこかしこにセットされている。こちらに引つかかっても、即座に警備員がやってくる仕組みだ。肉体面の健康管理は、働いている人間のためではなく、保安措置の一環として行われている。

廊下や各部屋の天井や壁には、カメラだけでなくスプリンクラーのようなノズルがいくつも備えられている。これも施設全体の安全が、中で働く人間の命よりも高く設定されている証拠の一つだ。

もし小規模な火災——施設全体やライフライン、重要区画に影響しないレベルの——が生じた時は、火が出た区画が封鎖されるとともに、各所に設置されたノズルから二酸化炭素が放出される。普通のスプリンクラーのように水を撒くと、「よろしくない」物が水に溶けて、それが流れたときに処理するのが手間だからだ。

火元に人がいた場合は速やかに逃げないと窒息死することになるだろうが、それは大した問題とはみなされない。

別のノズルは緊急時に炎を消すのではなく、逆に炎を発生させる。爆炎と言った方が正しいだろう。

緊急と定義される事態はいくつかが想定されている。まず、政治的・軍事的な対応や自然災害によって、この施設が破壊される可能性が生じた場合。または、主・予備・補助の全電源を喪失して、施設や区画が完全停電状態に陥った場合。あるいは連絡が8時間以上途絶えた場合。

こうした事態が起きるとシステムが起動し、各所のノズルから酸化剤と金属化合物を含んだ燃料がエアロゾルとなって放出される。エアロゾルは散布開始から3分以内に施設中に充滿し、これまた様々な場所に設置された装置から高密度サーモバリック爆薬が放出されて起爆する。4000度の炎と衝撃波が閉鎖された空間を隅々まで満たし、あらゆる生物を灰になるまで焼き尽くす。

その後、“焼却”された区画、あるいは施設全体が完全に閉鎖される。事後調査のために1か所だけ嚴重に管理された出入口が残されるが、そこを残して全てが閉鎖される。

何かあった時には、この職場は中が焼き焦がされたコンクリート製の巨大な棺桶になる。中にいた生物は全て灰になっているので、巨大な骨壺と言ってもいいかもしれない。

そんな場所で働くことが、高い給与の代償だ。

榊は自分の姿がおかしな具合にならないように意識をしながら、カメラの下を通して目的の部屋の前に立った。頑丈なドアの

横には掌紋センサーが備わった開錠装置が取り付けられている。

だが、いつもと違う部分があった。本来なら常にながちりと閉まっているはずのドアが、中途半端に開いたままになっている。これは非常にまずい。なぜ警報が鳴らなかったのかが不思議だ。普通なら自動で閉まり、何か故障があればすぐに警報が鳴る。

何しろ、この先には榊の職場で最も危険な物が保管されているからだ。それを研究するために、この施設は作られた。“それはあまりにも危険だ。絶海の孤島の地下に作って、緊急時には中を黒焼きにする仕組みを用意する必要があると思わせるほどに。

閉め忘れ一つで、下手をしたら全員が黒焦げにされてしまう。中に誰かがいてそいつがミスしたのであれば、ぶん殴って保安部に突き出してやるべきかもしれない。そう思って榊がドアを通り抜けた、何かにしたかにつまずいて派手に転んだ。疲れているせいで手を付くのが遅れ、したたかに額を打った。

意外にも痛みはなかった。それでも、転んだみじめさは変わらなかった。ノロノロと起き上がってドアの下を見たが、つまずくようなものはなかった。疲れのあまり、老人のように何もなかったところへ転んだというのか。見た目だけでなく、体の機能まで年老いてきているかのようだ。

不思議なことに、突如としてドアが自動で閉まった。榊が転んだことで、引つかかっていたものが取れたかのようだった。訳が分からなかったが、ひとまずは黒焦げにされる心配はなさそうだ。いずれにしても、ドアを開けたままにしていた奴にはきつく言っておく必要がある。上司にも報告するべきだろう。

困ったものだと思いながら奥へと進む。その先にある部屋が、

櫛の主な仕事場の一つだった。大量のモニターとコンソールがいくつも並べられ、壁には大きなモニターが何枚も掛けられている。まるでロケットの発射管制室か、軍の作戦司令部のような見た目だった。

櫛が入ってきたので灯りが自動で付いた。中には誰もいなかった。あのドアの開けっ放しは誰かが出た時に確認しなかったことが原因だろうか。とりあえず、上司が「出勤」してきたら報告しなくてはいけない。

櫛は壁のモニターを見つめた。この部屋には研究室につきものの品の数々——試料を取り扱うグローブボックス、薬品類の収められた棚、顕微鏡が乗った机——などはない。そうした物があるのは、今いる部屋の隣のエリアだ。隣と言っても、戦車の装甲級の強度を持つ複合素材と、50cmの厚さに重ねられた防弾ガラスで仕切られた「隣」だが。

隣の隔離された区画こそが、世界でもわずかなしいバイオセーフティレベル「5」の研究施設だ。

バイオセーフティレベルは、細菌やウイルスといった病原体などを取り扱う実験室や施設の格付けだ。セーフティレベルが高いほど、厳格な隔離、検疫体制が敷かれている。

レベル1なら16歳以下立ち入り禁止、飲食・喫煙禁止、微生物の取り扱い訓練を受けた人間に限定する、などの条件がある。これが2になると1の条件に加えて、バイオハザード警告標識の掲示、立ち入りの制限、実験中の施設管理、高圧蒸気滅菌装置やクラスII A以上の生物学用キャビネットの設置が義務付けられ

る。レベルが高い実験室ほど条件が厳しくなり、危険な病原体は高レベルの場所ではしか扱えない決まりになっている。

最高レベルは4で、実験室に入るまでに化学シャワー室、衣服を使い捨ての物に変える更衣室、化学防護服着用室を通る必要がある。外部と直通にならないように、どの部屋もドアは1つずつしか開けられない仕掛けだ。

メインの実験室は空気も気圧を操作して中から外へ流れないようにして、排気は2重のフィルターを通した上で行われる。外に出る場合、持ち出される全ての機器は滅菌され、着ていた使い捨ての衣服は焼却され、実験動物も同じように「消毒」される。つまり化学防護服を着用した人間以外の生物は、一度入ったら生きて出られない。

このレベルの実験室が必要とされる病原体は、エボラや天然痘、クリミア・コンゴ出血熱のような、素人でも致死性と感染性が高いことを知っている代物になる。

高レベルの実験室は設置に多額の費用が掛かる上に、それほど危険な病原体を扱う機会はごく限られ、実際に使いこなせる人間も多くはない。そのため、世界にあるレベル3、レベル4の実験室はそれぞれ50に満たない。日本ではレベル3が12か所、レベル4が3か所だけだ。高レベル実験室を擁するのは、いずれも世界に名だたる研究機関として知られている。

だが、世の中にはそれを超えるレベル5の実験室が存在する。こちらはレベル4とは逆に、その存在を知られてはいない。正確に言えば知られてはいけない。普通の人々はおろか、優秀な研究機関に知られることさえ憚られる物を扱うための場所だからだ。

研究室そのものはレベル4に準じた構造だが、なるべく中に入らなくてもいいように、今までが防護服を着て手で行っていた作業の多くが、遠隔で出来るように工夫されている。

研究者は自分のアバターとでもいふべきカメラとアーム付きのロボットを操作して、中で各種の作業を行う仕組みだ。櫛のいる部屋は実験室内部の様子を観察し、ロボットアームなどで遠隔で作業を行う制御室とでも言うべき場所となっている。実際に人間がレベル5に入って行う作業は、安全のために可能な限り避けられている。

基本的に実験室内に入りたいと思う者はいないので、制御室でほぼすべての作業を行えるシステムは、櫛を含め全ての研究員にとつてありがたい限りだ。何しろ、実験室内で事故に遭った場合、灰になるまで焼かれる方が救いだと思いたくなる未来が待っている。

これとほぼ同じ作りの研究室が、この施設には合計で3か所用意されている。櫛がいるのは第1研究室で、第2、第3の研究室が、互いに対角・対辺に位置するように作られている。万が一どこかで事故があった場合は区画が2重の防爆ドアで区切られて封鎖された上で焼却処理が行われる仕掛けだ。互いに離して作ることで、1か所が壊滅しても、他の場所は生き残ってデータを保存できるようになっている。

これだけ厳重な対策を行っているレベル5だが、その真髄は別にある。徹底的な秘密主義と最強の検疫体制。無人地帯の地下に施設を作り、緊急時には中を職員ごと焼き払って危険物を処分する。レベル4の施設そのものを隔離し、いつでも焼き払える体制

を保つのがレベル5だ。

ここに着任してレベル5についての説明を受けた際、同じ物が他の国にもいくつかあることも教えられた。ネバダの「ワイルドファイア」、アラスカの「ハイヴ」、シベリアの「ベクター2」、イギリス領南極地域の「ステーションN」、タクラマカン砂漠の「瘡部」。おそらくは他に何か所か。

それらが中に何を抱えているかについて、櫛もオリエンテーションを担当した上司も知らなかった。国家レベルのやり取りでは基本情報は共有されているようだが、櫛は知りたいとは思わなかった。恐ろしい物についての知識は、この職場で取り扱う物だけで十分だ。

櫛はモニターに表示された3Dモデルを見た。これがつい先日、完成したばかりの成果だ。ある種のタンパク質複合体の立体構造図。サンプルの発見からこの図が作られるまで、4年もの時間が消費されている。それほどまでに巨大で複雑な物だ。櫛がスカウトされたのも、これを完成させて研究を次のステップへと進めるためだった。

サイズは1つのタンパク質分子としてはかなり大きく、0.8マイクロメートルほどもある。既知のタンパク質で最大なのは、筋肉の収縮に関わるチチンだ。中でも人間の物が最も大きく、長さが1マイクロメートルを超える。

このタンパク質はそれに近い大きさがある上、構造は遥かに複雑だ、条件によって立体構造が変化し、場合によってはちぎれたり連結したりする。まるでクダクラゲのごとき群体生物なのかと

思うほどだが、あくまで生物ではない。タンパク質なのだ。生き物の体を機械に例えるのであればネジやナットなどの部品に相当するはずなのだが、それでいて生物のように振る舞う。

この上なく不自然な存在だ。宇宙人が作ったとか、異次元の生態系からやってきたとか言われると納得できてしまえるほどに。

あり得ない存在。単にそれだけなら問題はない。世紀の発見として発表してもいい。問題はこれが人類史上どころか、地球史上最悪クラスの病原体であることだ。対応策を研究する必要さえなければ、存在するサンプルを全て核兵器で焼却した上で、灰を固めて日本海溝へ沈めるべきだと榊は考えていた。

この病原体は他のタンパク質と接触することで構造を変化させ、自分と同じ形に変えてしまう。動物の体内に入ると体の部品を自分の複製にして増殖していく。

同様の性質は、牛脳海綿状症(BSE)やクロイツフェルト・ヤコブ病の原因となる異常型プリオンが有している。この異常型プリオンは脳の中にある正常なプリオンの形状を自分と同じ物に変えることで増えていき、脳に非常に微細な空洞を作り出すことで牛や人を死に至らしめる。

この病原体の性質もそれに近いが、対象にするアミノ酸やタンパク質の種類が多岐にわたり、脳に限らず体のあらゆる部分で増え、組織構成その物まで作り替えていく。

モニターの中に見える3Dの構造図は、赤や黄色のリボンや突起のような物が複雑に絡まり合った、訳の分からない者にしか見えない。初心者が作ったCGアートの様だ。これを見出すのにどれほどの労力が費やされたことか。だが、必ずや成し遂げなくて

はいけない事でもある。戦うためには敵の正体を掴まなくてははいけない。

榊がいる第1研究室は、生化学や分子生物学、構造生物学といったミクロの観点から病原体を研究する。感染した後の生物を病理学や生理学、解剖学的な観点から研究するのは第2研究室が行っている。研究室同士は物理的に離れているが、情報の共有は緊密に行われている。なので、榊はこのタンパク質が生き物の体の中に入った時に何を引き起こすのかをよく知っていた。

このタンパク質は体重300g以上の大きさを持つ動物であれば、何にでも感染する。人間以外に、犬や猫、さまざまな家畜も感染対象になる。世界中に大量にいるネズミ、どこにでも飛んでいる鳥、海を自由に泳ぐ魚。一度外に漏れだせばそうした生き物に乗って、世界中のありとあらゆる場所へと運ばれていく危険性がある。

感染の経路は主に体液感染だ。感染生物からの咬傷・搔傷、粘膜や傷口に対する感染生物の体液の接触で感染する。感染率及び発症率は100%。現在のところ、例外は発見されていない。

こいつに汚染された生物と、それらが垂れ流すものは須らく感染源になる。イワシをフライにして食べてもアウト、乾燥したハトの糞の欠片を吸い込んでもアウト、ネズミに咬まれてもアウトだ。

体内に侵入した後、病原性タンパク質は血液、リンパ、細胞間液を通じて全身に伝播する。分子サイズは大きいが、一旦分解された後に再結合したり、侵入を防ぐ組織それ自体を侵食したりすることで通り抜けていくのだ。この過程で免疫細胞と結合するた

め、免疫機能がこのタンパク質を排除することができない。

さらに、血管を侵食して広がっていく性質から、脳への異物侵入を防ぐ冠門も役に立たない。脳につながる門を閉めても、門や壁その物を取り込んで入り込んでくるような物だ。

このタンパク質が人体に入り込んだ場合に起こる症状について、榊は完璧に記憶していた。

感染してから約12～24時間程度で、高熱、関節痛、のどの痛み、頭痛といったインフルエンザ様の症状に加え、全身の激しい痛痒感が引き起こされる。その後、意識障害、痙攣、うわごと、譫妄の症状が生じるようになる。

全身の皮膚組織（主に顔面、胸部、手足）には、散発性の細胞壊死が発生する。主な症状は浮腫、紫斑、水疱や血疱、陥凹性壊死など。壊死性筋膜炎に類似した外見を呈するが、組織の破壊は真皮・脂肪組織までにとどまり、筋肉組織は維持されることが多い。

端的に言ってしまうと、感染した者は体の表面が生きながら腐れ落ちていくということだ。第2研究室に保管されている記録の写真やサンプルの姿は、目を覆わんばかりの有様で、初めて見た時に榊も気分が悪くなった。

感染による変異は体の表面ばかりでなく、血液および血管構造にも及んでいく。血液は黒化して粘度がグリセリンと同程度の約1500になり、赤血球の酸素含有量が著しく上昇する。血液の粘性の上昇によって心臓から送り出される血量が減少する代わりに、循環機能は強化された血管運動によって維持される。肝臓及び腎臓の機能は低下するが、老廃物は血管外に直接排出されるよ

うになり、変異による神経系および筋肉系への異常は生じない。

血液粘性の増加によって、感染者は外傷に起因する出血量が非常に少なくなる。さらに、循環の多くが血管運動によって行われることで、主要循環器系の損傷へ高い耐性を獲得することになる。

感染した者は生きながら腐り落ち、血液はヘドロのようになって体中から悪臭を発し、それでいて死ぬこともままらなくなる。まさに地獄といえる。

顕著な症状が確認出来るようになってから2～5時間以内に、感染者は短時間の昏睡状態に陥る。この状態では心拍数は20分に1回未満、体温は外気と同一となり、この時点で以て完全に回復不能の状態になったと判断される。この活動停止状態は「休眠」、あるいは「一時的死」と呼ばれ、この間に皮膚組織の壊死と循環器系機能の再構築が急激に進行する。1～3時間程度の休眠状態を経た後、感染者は覚醒して活動を再開する。

「覚醒して活動を再開する」。これがこの病気の最悪な部分だ。感染から数時間で死ぬ病気は危険ではあるが、感染症としての脅威度は低い。他人に感染させる前に死ぬので、社会に広がりにくいからだ。伝染病が脅威になるのは、感染した人間が死ぬか治るかする前に動き回る猶予がある場合だ。

榊はモニターに手を伸ばし、表示されているモデルに手を触れた。これを作ったのは確かにかなりの大仕事だが、世の中に公表されることはあり得ない。それが正しい。これに関する情報は、一切外に出されるべきではない。

モニターに手を触れていると、突如として画面がブラックアウト

トした。どうじに部屋が一瞬だけ暗くなったような気がした。櫛はぎよつとしたが、その直後にすべてが元通りになった。やはり気のせいだったのか。電源が落ちれば、問答無用でこの区画ごと消し炭にされる。やつと仕事が一歩前進したところで、そんな目に遭わされるのは惜し過ぎる。

この画面を消すように病原性タンパク質を失活させられる方法が見つければ、予防や治療に役立てることが出来る。だがそう簡単にはいかないだろう。普通のタンパク質とはわけが違う。熱、紫外線、放射線への耐性がやけに高く。こいつを破壊できるエネルギーを与えた場合、ほぼすべてのタンパク質が分解するか変質してしまう。こいつを破壊する場合、感染した生物の体全部を損傷させるほどの処理を行わなくてはいけないのだ。すなわち、即死レベルのガンマ線をしばらく浴びせるか、灰になるまで焼き尽くすか。それが現在のところ唯一の「治療法」だ。

タンパク質の構造は判明したが、それはまだ入り口に過ぎない。櫛の仕事はまだ始まったばかりだと言える。仮眠を終えたからには、やらなくてはいけないことがある。よれよれになってもやるべきことが。

そう考え、研究室内のシステムを動かす端末に向かったが、自分がこれをどうやって動かせばいいのか分からなくなっていることに気が付いた。無意識にやっていた動作を意識すると、どうすればいいのか分からなくなってしまう時のように。動作のゲシュタルト崩壊とでもいうか、歩き方が分からなくなったムカデというか、そんな状態になっていた。

少し寝た程度では疲れが取れなかったのか、一度緊張が切れた

せいで、色々とりセットされてしまったらしい。よくよく考えてみれば、仮眠をとる直前にやっていた作業が思い出せない。疲れすぎて半ば自動的に行っていたのだろうか。まるで、この代物に感染してしまったかのようなだ。

これに感染した場合、体だけでなく脳——人間としての人格や認知力、思考力までもが失われていく。肉体が生きながら腐敗していくよりも、そちらの方が恐ろしいかもしれない。櫛のようなインテリはもちろん、自分であることが失われる恐怖はあらゆる人間にとってこの上なく恐ろしい。

感染して昏睡状態から目覚めた患者は、失認症、失語症、記憶障害、快感の消失などの症状を呈する。人や物の様態を正しく捉えられなくなり、言葉をまともに発したり理解したりできず、自分も周りの人も物も思い出せず、楽しいや嬉しいといった気持ちも失われる。

組織の壊死は筋肉や神経には及んでいないために運動機能は残っているが、条件行動、運動制御、本能行動が損なわれ、動きは無気力で疲れきったような物になる。あたかも酔っ払いのようにならつくばかりで、走ったり、梯子を上ったりすることが出来なくなる。失認や記憶障害のせいもあって、指先を使った細かい作業も出来ない。感覚の鈍麻に伴って痛覚も極めて鈍くなる。

こうした症状は例が無いので、便宜的に「意識欠陥活動低下障害（CDHD）」の名前が付けられている。

CDHDに加え、感染者は摂食を中心とする欲求行動や、攻撃行動の抑制が不可能になる。さらに、他の生物——牛馬から猫程度の大きさの範囲内にある動物——に咬みついて捕食しようとする

る、反社会的行動パターンを見せるようになる。著しく攻撃的になり、動物を見つけ次第取って喰おうとするのだ。

榊がぼんやりしているのは疲れと寝ぼけによる物なので、時間が経てば治る。それに対し、感染によって行動が変化してしまえば治療の手立てはない。体の組織構造自体が変化して、タンパク質レベルでの変性が起こっている。目玉焼きにした卵を生に戻す方法が無いのと同じだ。

榊がタンパク質の解析を行って何らかの成果を出せるとしたら、それはこのタンパク質を選択的に破壊したり、免疫系に排除させたりする、初期治療か予防の段階での話だろう。インフルエンザに似た症状が出た時点で、すべてが手遅れになっている。

治療方法は安楽死だけだ。だが循環器系と血液、組織の変異によって、撃つても刺しても、毒を注射しても死なくなっている。中枢神経系を物理的に損壊させるか、全身を熱や放射線で「消毒」するしかない。

もしも自分がそうになったら？ 機器の電源を入れるのをあきらめた榊は、自分が「あの」ような姿になった場合を想像した。ここに来たときに見せられた感染者の姿を。あれは一目見たら、誰もが二度と忘れられなくなる。

感染者の生きたサンプルは第3研究室で「保管」されており、施設に来た者は感染者の姿を1度以上目にするのが慣例となっている。研究者は自分がこれから扱う存在を理解するため。保安職員は万が一の際に、自分が対峙する「敵」の姿を知っておくために。

保管されているサンプルは8体。榊が最初に見たのは、まだ若い男性の感染者だった。データには感染前の顔写真を除いて個人

情報は記載されていなかった。年齢、身長、体重といった身体的データ、感染したのがいつかということだけ。感染前の顔立ちはどこにでもいそうな普通の若者とでもいふべきものだったが、防弾ガラスと特殊鋼のフレームで作られた防護チェンバーの中の「もの」は全く異なっていた。

背格好だけは人間の形をとどめていたが、肌はどす黒さを伴った灰色となり、酷く乾燥してしわが寄っていた。目やほほの周りは落ちくぼみ、髪はまだらに抜け落ちて、頭皮にみすぼらしく張り付くだけになっていた。

皮膚や皮下組織があちこちで壊死しているせいで、顔の一部から頭蓋骨が覗いている。委縮してまくれ上がった唇から暗い褐色になった歯が覗いていた。片方の頬は皮膚がごっそり失われ、黒色になった筋肉がむき出しになっている。

服は感染前から着ていたと思しき作業服だった。もともとはネイビーブルーだったようだが、大量の黒い染みが手足や胸元に付いているせいで、酷くカビているかのような見た目になっていた。黒化した血液が壊死した組織から漏出し、あのように服を汚すのだと教えられた。

チェンバー内の「それ」は、無気力に立っていることを除けば、死後1カ月ほど経った死体その物の見た目をしていた。

見学は「給餌」の時間にセットされており、榊はその様子を目にするようになった。チェンバーは大きな仕切りで2つに分けられており、片方ずつ清掃および消毒をしたり、実験に用いるための拘束具を準備したりできるようになっている。

榊が見ていると、感染者がいない方の側に太いホースが接続さ

れ、接続口から1匹のウサギが送り込まれた。実験によく使われる日本白色種だったが、動きがやけにゆっくりとしていた。説明されたところによると、少量の筋弛緩薬を射って、感染者が捕えやすいように動きを遅くしているのだという。エサに関しては、遅くても良いのでネズミ以上のサイズがある生餌である必要があるらしい。

ウサギは不穏な空気を感じているのか、力ない様子を見せながら、しきりと周囲を嗅ぎまわっている。ウサギを送り込んだ接続工が閉鎖されてホースが外されて収納されたのが確認されると、仕切りがゆっくりと上にスライドした。

2つの部屋の間に空気が行き来するようになると、感染者とウサギが同時に反応した。感染者はそれまでろくに動かず突っ立っていただけだったのが、スイッチが入ったように仕切りの方に向き直った。ウサギの方は明らかに警戒し、恐怖にとらわれたかのように、よろめきながら仕切りから離れようとした。

仕切りが8割がた上がつてウサギの姿が見えるようになるや否や、感染者は即座にそちらに向かって歩き始めた。チェンバー内は完全に密閉されていたが、設置されていたマイクを通して、スピーカーから凶暴なうなり声とうめき声を合わせたような声が櫛の耳に届いてきた。

感染者は両手を前に突き出し、不安定ながらも速足ぐらいのスピードでウサギに歩み寄り、動きの遅い哀れな獲物を捕まえた。皮膚が腐れ落ちて爪もほとんどが剥がれた手に捕まれたウサギは暴れて指に咬みついたが、感染者は全く頓着せずに口へと運び、ウサギの顔にかじりついた。

スピーカーから甲高い絶叫が響き、ウサギの後肢が激しくバタつく様子がモニターで確認できた。感染者がウサギから顔を離すと、白い毛皮に覆われていた顔の右半分は、組織がなくなって赤い髑髏のようになっていた。感染者はウサギの顔の半分を少し咀嚼して飲み込むと、またウサギの体に咬みついて毛皮ごと肉をむしり取った。

普通の人丸ごとのリンゴや桃を食べるときと同じように、感染者は生きたウサギの体をむさぼった。果汁の代わりに血やこぼれた体組織が床に落ちて汚していく。ウサギの体から死後の痙攣も無くなると、感染者は興味を失ったかのように食事を終えた。先ほどまでかぶりついていたウサギから手を離し、エサが与えられる前と同じようにその場に立ったまま動かなくなった。

チェンバーの中には、手と顔、体の正面を真っ赤に染めた腐乱死体のような“もの”と、先ほどまではウサギであった残骸、そこからこぼれた血や体液の水たまりが残るだけになった。

“あれ”を作り出す存在が、これからの君の研究テーマだ。案内をした職員がそう言ったのを、櫛は今でも鮮明に憶えている。

腐乱死体同然の外見でありながら活動を続ける。循環器系と血液の変異による負傷への耐性。人格と知能の喪失。無気力な動き。他者を捕食しようとする行動。咬傷による感染。

関係者の間で交わされる数少ない文書では、この疾患は「体液黒化症」という名前で表されている。具体的な症状を隠すためのコードネームに近い呼び方だ。

それに対して、隠す必要が無い櫛ら職員の間では、もっと簡潔

で分かりやすい名前が定着している。

“ゾンビ病”という名前が。

この疾病を表すのに、これほどふさわしい呼び名は無いだろう。映画や小説、ゲームの世界で散々に語られ続けてきたゾンビ病原体が、現実の世界に漏れ出してきたかのようなものだ。

病原体であるタンパク質が、宇宙人が作ったか、異次元の生態系からもたらされたかした物であっても驚かないというのは、あまりに良く出来過ぎているからだ。

ゾンビ病。ばかげた話だが、実物が現に存在している。電源が入ったままのモニターに映っている代物は、少なくとも幻ではない。

ぼんやりしたままの頭を抱えていてはこれ以上実験室に居ても意味が無いどころか危険なので、榊は食堂でコーヒを飲むことに決めた。食事が提供される時間からは外れているが、無料のコーヒサーバーが置かれている。

榊は少々ふらつく足取りで研究室を出た。外に続くドアは、内側からならノブを動かすだけで開けることが出来るのが幸いして、今度は失敗せずに無事に開けることが出来た。入ってきたときとは違って何かにつまずくこともなかったが、足元の感触が少し気持ち悪いように思えた。滑るような、ヌルついているような。

もちろん、何も落ちていないようには見えなかった。疲れていることと、先ほど転びかけたせいで、神経が高ぶっているのだろう。

いっそのこと休暇届を出すべきだろうかと思つた。頭の中がポンコツのままというのは非常にまずい。ひとまず落ち着かねばいけない。

無数のカメラとノズルに見守られた廊下を、なんとも頼りない足取りでカフェテリアへと向かう。生活に係るライフラインは、3つの研究室の中央部分に置かれている。否応なく缶詰にされる研究者のために、食事はそれなりに良い物が提供され、娯楽などのサービスも充実している。一歩間違えば消し炭にされる危険と釣り合うほどの物かはわからないが。

カフェテリアは別の研究室の職員同士での交流の場になっている。全体の研究報告会が行われているが、個人間でのやり取りの存在も重要になる。研究室ごとに専門分野が違うので正しい理解ができるとは限らないが、異分野の人間がもたらす発想や知識、考え方が起爆剤として問題の解決に貢献することはよくある。

それにどことも知らない孤島の地下に閉じこもっている状態が続くと、いろいろと話す相手が欲しくなる。どうせこの島の外には一切の情報が漏らされないいで、研究室同士の情報が隠されるようなことは全くなかった。やっている仕事の内容もかぶっていないので、ライバル意識などもない。そういう意味では風通しの良い職場なのかもしれない。

榊もここに来てから他の研究室のメンバーとカフェテリアで話をするのがよくあった。特に気の合うのは第3研究室で働いている神経科学が専門の職員で、感染者の行動や認知についての話をするのがよくあった。

第1研究室が病原体である病原性タンパク質の研究、第2研究室が感染した生物の生理学の研究を行い、第3研究室では“生きた”感染者者を利用した実験を行う。感染した人間がどのように動くのか、脳や体が何に反応するのかと言った、神経科学の分野か

ら感染者の行動を解き明かす。

もしも感染者の捕食行動の抑制が可能になれば危険度は低下するし、何らかの方法で動きを誘導できるのであればそれも役立つ。自死や共食いを誘発させることができるのならさらに役立つ。

第3研究室の友人の話は、感染者自体を扱うことがない櫛にとつては非常に興味深かった。ネジやナットの金属組成の研究をしている人間が、それらの部品が使われたジェット機の働き具合を聞かされている感覚に近いのかもしれない。

その友人は、感染者の認知力のテストを以前から何度も繰り返して、彼らが見聞きしている世界の様子を把握しようとしてきたと語った。

これまでの実験により、感染者は通常の人間と同じように視覚、聴覚、嗅覚で外界を判別していることが分かっている。だが、触覚は鈍麻して痛覚はほぼ無いに等しく、味覚は完全に消失している。

嗅覚面では捕食動物と同様に体臭や血液の臭いに引き寄せられる傾向を見せるが、加熱された食品の（旨そうな）匂いや、熟した果物の甘い匂いへの反応は鈍くなる。高い栄養価を持つ物より、生きた動物を重要な食べ物と見なすのだ。また、肉食獣にとつて腐臭は食べられそうな死肉の存在を示すために興味を示す対象になるが、感染者は忌避しない代わりに興味も示さない。生きている対象だけを嗅ぎつけるようになっていて、これは、死肉は感染させる対象になりえないために無視するようになっていたためだと思われる。

腐臭を無視する性質は、感染者同士の共食いを防止する機能も生やす。感染者の国家した血液も普通の物とは異なって腐臭に近いにおいを放つことから、体中からへドロのような血を垂れ流している同族は興味を引く存在にはなりえない。

音に関しては、通常の人間が4000Hzあたりの高周波音を聞き取りやすいのに対して、もっと低い500Hz前後の音に対しても敏感に反応するようになる。普通の人間は女性や子供の声、特に叫び声を聞きやすいように進化しているが、感染者は凶暴な唸り声や濁った叫び声が良く聞こえる。これは感染者が獲物を発見した際に立てる音だ。普段は同族の存在を無視しているも同然だが、1体が獲物を発見して声を出すと、それを聞き取って集まってくるのだ。

視力は通常の人間よりも低下している。目のピントを合わせる水晶体を動かす毛様体筋の伸縮能力が低下しているためにピントを合わせる能力に乏しく、極度の近視のような視界を持つと考えられている。また涙の分泌量が減っているのも目の表面が保護されなくなり、感染から時間が経つと角膜に微小な傷が大量に付いて擦りガラスのようになることも視力の低下に拍車をかける。このせいで感染から時間が経った者は、眼球が濁って見えるようになる。

視力と認知力の低下によって者の形を把握する能力は下がるが、動きには過敏に反応する。特に生きている動物を連想させる動き、素早い横方向への動きには反応するが、逆に垂直方向への動きに対する反応は鈍い。垂直方向に逃げられる鳥は捕まえられないし、それ以外の生き物は真上に飛んで逃げるなどほぼ無

いので、捕まえられそうにない存在に興味は持たないようになっていた。

それ以外に、光や熱に対する走性を見せる。暗い中で光は、生きている人間の活動の証だからだ。夜に部屋の窓から漏れる光や動く懐中電灯の光を視認すれば、真っ先にそちらへと向かうだろう。

これと反対に、動かない物——死体など——は認識することができなくなる。首尾よく獲物を捕まえてかじりついても、相手が死ぬなり気絶するなりして動きを止めれば、さほど食べないうちに存在を忘れたかのように無視するようになる。櫛も、感染者がウサギを食い散らかす様子を見てそれを知っている。

生きている獲物を見失ってから追跡を停止するまでの時間と、食べている対象が動かなくなってから食べるのを止めるまでの時間は、個体ごとにおおよそ共通している。このことから、感染者は食べている物が死体になると、見失うのと同じように「認識できなくなる」と考えられている。カエルが動いている物にしか食らいつかないのと同じように、動いている物しか認識しないのだ。

さらに、食事の対象をまだ認識している状態であっても、新しい動く獲物を発見した場合は攻撃対象をそちらに移す。ムカデや網を張らない徘徊性のクモの中には、食事中であっても新しく獲物を発見すればそちらに狙いを移す物がある。それと同じような物だ。

動く物しか狙わない。食事より新たな獲物を優先する。この2つの性質を同時に持つのはおかしく見えるかもしれないが、感染を広げる媒介者としてみた場合は理想的と言えるだろう。

病原性タンパク質は生きている物にのみ感染して変異させる。感染者が襲った相手が骨になるまで食べ続けるより、生きている物だけを優先して次々襲いまくる方が、はるかに効率的に感染を広げられる。

また、襲われた側も体が完全に損壊するまで食べられれば変異しようがないが、襲ってきた感染者が完全に食べつくす前に狙いを次に移せば、犠牲者は生き延びる。そして、時間が経てば新たな感染者に変化する。

どれを見ても完璧と言っているほど、感染の拡大に適したシステム。このタンパク質は、浸食した動物——主に人間——を、凶暴な肉食獣に変えるだけでなく、非常に効率的な媒介者にもする。感染させられる対象だけを認識して興味を持つように、各種の認知機能を調整するのだ。

普通の感染症をもたらすウイルスや細菌、寄生虫は、長い時間かけた進化によってこうした性質を獲得した。寄生虫の中には、宿主の行動様式を変化させて、自分の繁殖に都合がよいようにコントロールする物もある。

それに対して、タンパク質はそれ自体が進化する物ではない。今日に至ってさまざまな形態が存在するのは、それを作り出す生命が進化してきたからだ。

BSEやクロイツフェルト・ヤコブ病の原因であるタンパク質は、羊や人の脳の内部で発生した。ならば同じように「発生源」があると考えてもいいというのが、櫛と友人の間での共通意見だった。だが、存在そのものを秘匿している病原体なので、刑事よろしくいろいろな国の保健機関に電話をかけまくるわけにはい

かないので、意見書は出してみた物の、今のところ保留となっている。

相手がタンパク質なので、分子系統解析の手法を用いて発生源を探す試みも提唱されている。アミノ酸やタンパク質、DNAの変化の度合いから、進化のプロセスや変化にかかった期間を見出す手法だ。ただ、今は比較対象がまだ確保できておらず、それができる専門家で、なおかつこの施設で働けそうな人材が確保できていないため、こちらも保留の状態だ。

そのような情報を第3研究室の友人と交換していく中で、榊の気を引いた物があつた。

第2研究室との共同で行った検査で、感染者の脳の機能を解析した際の話だ。感染者の認知機能は通常の人間のそれに比べると著しく損なわれているが、脳その物の働きは「壊れて」いないらしい。死体その物の見た目に反して、脳はどこかが壊死するようなことはなく、信号自体は発しているのだという。

榊には専門外なのですべて理解できたわけではなかったが、ポジトロン断層撮影や近赤外線イメージングなどの手法によって、脳の各部位の活動量を把握できるのだという。その結果、感染して転化することで発生する症状に関わる部位——認知、言語、感情、外部からの情報処理——はそれなりに活発に機能しているのだという。

それではなぜ感染者は「ゾンビ」になるのか。友人が言うには、脳のそうした部位は活動こそしているものの、それが外部へと出力されない、いわば夢を見ているような状態になっているらしい。榊は夢を見ている状態から「目覚める」、つまり情報が正しく出

力されるようになれば治るのではないかといったが、事態はそう簡単ではないと言われた。

確かにある時期まで脳は活動していくが、認知症と同様にそうした部位に不要な物質が貯まり続け、やがて委縮して機能を果たさなくなっていくらしい。これは脳の血管から侵食してきた病原性タンパク質による変質が原因で、どちらにしても阻止する方法はない。

脳がまだ活動していることを証明するかのように、感染者は転化してからもしばらくは、おぼろげながら周りを認識しているようなそぶりを見せる。獲物を襲ったり追跡したりしていないときは、自分に関係ある場所をうろついたり、何度も行ってきた動きを繰り返したりすることが多いという。元がシステムエンジニアなら、モニターが置かれた机の前に好んで立つことが確認されている。兵士の場合、おもちゃの銃を与えるとそれを持ち、銃声を聞かせたときは構えようとする動作を見せる。実際に道具や機器を操作することはできないのだが、夢遊病の患者が起きているときの習慣を無意識に行うのと同じようなことをするのだ。

そうした動きを見せるのは感染から長くても2週間程度で、それ以降は頻度が少なくなり、最終的に非活動時は立ったまま動かなくなる。榊がこの施設に來た時に見たように、エサになる生き物がやってこない限り、延々とその場に立ったまま待ち続けるだけになるのだ。

「生前」の動きをトレースしている状態の感染者に意識があるのか、ということ友人に尋ねると、彼はしばらく考えた後、「おそらくある」と答えた。確証はないが、彼らは頭の中だけで「い

つもの生活をしているのだが、体の実際の動きと乖離してしまっているのではないかと彼は考えていた。

感染者は何も映っていないテレビを見つめて、いつも見ている番組が画面に映っていると感じている。彼らの能の中では、以前に見た番組の記憶が画面に投影されている。リモコンでテレビを切る場合は、実際に手に持ってボタンを押さなくても、いつもリモコンを置いてある場所に手をやって、手を画面に向ける動作をする。動かない死体や同族は認識できないので、食い散らかされた死体が転がり、転化した感染者がうろつく道を、いつも通り人がいる通勤路と思って会社へと歩いていく。

酷く奇妙な話だった。感染者は自分が死体のような見た目の凶暴な肉食獣になっても、しばらくはそれを自覚できず、頭の中では普段通りの生活をしていると思っているのだという。人間をゾンビに作り替えるタンパク質が存在するのだから、それぐらいおかしいことが起こっていてもおかしくは無いが。

そんなことを思い出しながら、榊はカフェテリアがある区画に入ろうとした。この時間には第3研究室の友人はいないだろうが、また会った時に聞いてみようか。

普段なら角を曲がると部屋が大きく広がって研究とは関係が無いところに入ったことが実感できるのだが、廊下の端は壁になっていた。道を間違えたかと思ったが、よくよく見ると壁ではなく鋼鉄製のプラスチックだった。緊急事態が起こった時に、発生源のある区画を完全に封鎖して隔離するための強固な障壁。銀行の大金庫のドアよりも強固で、内側で燃料気化爆弾が爆発してもそれを通さない。つまり、榊が今いる区画を焼き払ったとしても、

他の区画に影響が出ないようになっている。

“消毒”の準備が完了している。

その事実を認識しても、榊は自分が平静を保っていることに気が付いた。それがなぜか分らない。平静というよりも、どうでもいい、頭が回らないというような感覚がする。

とりあえず、これでカフェテリアには行けなくなった。コーヒーも飲めない。自販機でパンを買うことも出来ない。そう思うと、自分がひどく空腹であることにも気が付いた。

それにしても、いつプラスチックドアが閉鎖されたのは。説明では警報が鳴るはずだが、寝ている間に作動したのか？

その時、榊の花に何やら旨そうな匂いが届いてきた。カフェテリアがあるのは水どころか空気も漏らさない鉄壁の向こうだが、何やら食欲が刺激される成分が含まれているような気がした。匂いは封鎖されたドアの反対側、先ほど通り過ぎた部屋の1つから漂ってくる。

体がそれに引き寄せられるように動き始めた。匂いを正確にたどっていく。いくばくかの生臭さと強い鉄の臭い。同時に、何かがぶつかる音と、低い唸り声が良く聞こえた。そちらに行かなくてはという思いが強まる。腹が減っているのだ。

開いたままのドアを通り抜けると、隅に誰かがいるのが見えた。人がいるのは分かるのだが、顔が良く見えない。よく見ようとしても見えないので、考えないことにした。部屋の中は電気が付いていて形が見えるのだが、視界は暗いような気がする。物の置き場が分かるのは、それを記憶していることが理由だった。

人影が腕を振り上げて、勢いよく振り下ろすと、鈍い音が聞こ

えてきた。持っている何かで、目の前にある別の物を叩いたらしい。それまで認識できなかった「別の物」が倒れるのが見えた。

不思議なことに、倒れていく方は、先ほどもそこに存在することに気が付かなかった。倒れていくようになると、突如としてそこにそういう物があつたのだと分かるようになったのだ。

ただ、榊は倒れていく方に興味が持てなかった。特に気になる臭いはしないし、倒れるとまた見えなくなった。気を引く匂いは立っている人影の方から漂ってくる。人影は何か音を出している。音そのものは良く聞こえるが、内容を判別が出来ない。

まあ、そんなことはどうでもいい。とりあえず、これは食べる必要があるらしい。脳の中の、どこか重要な部分がそう命じている。

榊は両手を前に出して、人影の方へ足早に近寄って行った。

壁にかけられたモニターの一つに、白衣を着た感染者が生存者に掴みかかる様子が映っている。生存者は腕を払いのけて逃げようとしたが、前に出した手を咬まれて指を食いちぎられた。ひるんだところに感染者は襲い掛かり、顔に食らいついた。

画面越しでは音は聞こえなかったが、生存者はひどい悲鳴を上げているのだらう。感染者が顔を上げると、口にぼろキレのようなものを啜っていた。生存者の顔の皮と筋肉を食いちぎったようだ。それを塩化し、掴んだままの生存者の顔に再び噛みつく。

モニターを見ていた者の一部は思わず顔を背け、ある者は眉間にしわを寄せながらも目をそらさず、またある者は表情を変えずに食い入るように見続けた。

レベル5研究室を備える施設のコントロールルーム。ここには施設の保安責任者と研究責任者、そして何人かの研究職員が集まっていた。第1研究室の者は数が少ない。漏出した病原体にやられ、感染するか、感染した者の餌となった。

責任者は、約72時間前に発生したこの惨事を思い返した。

バイオハザードの発生源は第1研究室だった。ここは病原体があっても感染を媒介する生物を扱っていなかったために、バイオハザードが起こる可能性が最も低かったのだが、思わぬ落とし穴があつた。作業用ロボットを点検する際の消毒の手順を遵守しなかった間抜けがいたのだ。

本来ならばクリーンルームで防護服を着た上で完全に分解し、全ての部品の全ての面にガンマ線を照射して余すところなく有機物を焼き尽くさなくてはいけない。それを、ある整備員が手順を守らなかったせいで、ロボットに付着した病原体に暴露したことでこのような事態が生じた。天文学的に起こる可能性が低い事態だったが、発生したということが唯一の事実だ。

幸いにして第1感染者が他の区画に入る前に封鎖に成功した。中の人間は非感染かどうかに関わらず閉じ込めることになったが、それは最初から想定されている範囲内だ。

すでに再発防止のために整備手順の見直しが行われている。2度と同じことを生じさせない。

問題は封鎖した第1区画の処理だった。正しい処理手順では、封鎖を完了した後は「焼却」を行う。作動のためのキーは既に責任者の手の中にあつた。

だが、72時間の猶予が与えられた。第3研究室の責任者から

の幼生で、感染区画の状況をモニターしたいとの要望が入ったのだ。

転化してから間もない感染者のサンプルは数が少ない。そもそも、サンプルに“使う”生きた人間は、国の権限をもってしても簡単に手に入るものではない。それに下手に感染者を増やすと、管理に問題が生じる可能性がある。第3研究室は、めったに手に入れないサンプルの行動を知りたがっていた。

同時に、実際の生活空間内における感染者の行動を調べられる機会でもあった。閉鎖された狭い実験室内での試験では、得られる反応が限られている。本当に感染が外の世界で広がった時に、感染者がどのように行動するのかというサンプルが必要だというのが、第3研究室の主張だった。

責任者は考え、72時間の猶予を許可した。

それから現時点に至るまで、研究員たちは可能な限りのデータを保存し続けた。咬まれた者が転化し、転化した者がさ迷い歩き、生存者の抵抗にどう反応するかを見続けた。

気が狂っていると人は言うかもしれない。だが、この病気が外に漏れた際に、今彼らが集めているデータが役立つかもしれない。彼らはやるべきことをやっているに過ぎない。事故の犠牲を無駄にしないという意味では、これが最も正しいともいえる。

そして、彼らのデータ収集も終わりに近づいている。あと2分で封鎖から72時間が経過する。生存者は、つい先ほど画面の中で食い殺された研究者が最後だった。ブラストドアの近くまでたどり着き、カメラに向かって手を振り、開けるように懇願する様子が何時間も録画されたが、やがて諦めて近くの部屋に閉じこ

もった。

だが、食料を調達しよとした際に見つかったのが運のつきだった。追いかけてきた感染者——元は研究員の女性だったらしい——を殴り殺したが、声を聞いてやってきた別の感染者に食われてしまった。2分後には一瞬で焼け死ねたのに、その機会を逃したことが彼にとつての不幸だと言えた。

「彼を知っています」

隣で声が聞こえ、責任者はそちらを見た。データ集めをしていた第3研究所の職員が、モニターに映る感染者を見ていた。

「この感染者か」

「ええ」

責任者はカメラに備えられているIDリーダーが読み取った情報をモニターに表示した。

「榊陽介」

「よく一緒に食事をしました。優秀な奴です。いや、奴でした」

「病原体の構造を解析に貢献したと聞いた」

「そうです。惜しい人材を亡くしました」

「まったくだ」

モニターの中で、72時間のカウントダウンが0になった。責任者はコンソールに近づき、首に下げたケースからカギを取り出した。コンソールの鍵穴に挿し込んでひねり、キーパッドで暗証番号を入力すると、赤いボタンを覆っている蓋のロックが外れた。

ボタンを押す前に、責任者はモニターをざっと眺めた。感染前の行動をなぞるようにうろつく感染者、廊下に転がる喰われた死体、まだ無傷の部屋、世界最高レベルの研究室。

責任者がボタンを押すと、各所から燃料が噴き出し、モニターが霞んで見えた。その2分後、猛烈な火炎が汚染された区画を舐め尽くし、設置されたカメラを全て破壊した。

感染した者たちの肉体が消し炭になるとともに、全てのモニターの映像が消えた。

喫茶店文芸 2022 年 7・8 月合併号

サイト URL

<http://literarycafe.wp.xdomain.jp/>

監修 マサユキ・マサオ

編集 氷川省吾

御大工店
目録
文書
和紙